

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第5輯

主要地方道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴う

# 仏 並 遺 跡

—— 発掘調査報告書 ——

1986

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



遺跡全景(南から)



調査区全景(東北から)



G-20UG区断面(北→南)



G-20SF区断面(東→西)



193-O D完掘状態



393-O U検出状態



374-O D内炉跡



374-OD出土土製仮面



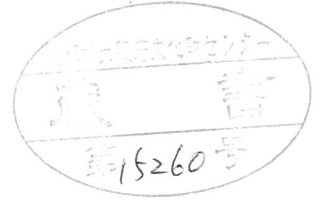
1



5

71-OD出土土器

## 序 文



大阪府の南西部を占める泉州地方のなかでも、和泉市には奈良時代国衙がおかれるなど、古くから和泉国の中心として栄えてきたところです。市内各所には多くの遺跡が残り、近年は大規模な開発に伴い発掘調査されたものも数多くあります。

しかし和泉山脈に近い山間部ではこれまで未知の部分が多かったのでありますが、今回はじめて本格的調査の手が仏並遺跡においていれられたのであります。その結果、意外にも近畿地方では稀有の例に属する縄文時代の集落を検出することができました。その結果は本書に記す通りであります。また、竪穴住居跡やそれに伴う墓域、祭祀遺構などがとらえられたことは特筆すべきことであり、出土した遺物とともに今後の研究の基準になることは間違いございません。

今回の調査は泉州沖新空港関連事業のひとつ大阪外環状線建設の事前調査として実施したもので、調査に際して大阪府教育委員会、大阪府土木部、和泉市教育委員会、その他地元関係各位には絶大なるご協力、ご支援をいただきました。深く謝意を表しますとともに、今後とも当協会の調査事業にご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

昭和61年 3月31日

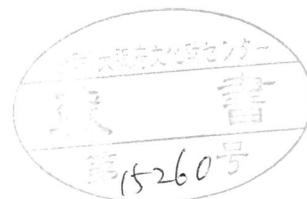
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 黒田 幸雄

# 例 言

1. 本書は主要地方道枚方・富田林・泉佐野線バイパス（大阪外環状線）予定地内、仏並遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は大阪府土木部の委託を受けて、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
3. 調査は財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査課技師岩崎二郎・松尾信裕・田中龍男・服部みどりが担当し、昭和60年6月25日現地における調査を開始し同年11月22日終了した。引き続き遺物整理事業を行い昭和61年3月31日終了した。
4. 調査の実施にあたっては大阪府鳳土木事務所、和泉市教育委員会、和泉丘陵内遺跡調査会、地元各位の協力を得た。
5. 調査および報告書作成にあたり、次の各氏から指導・助言を得た。記して謝意を表する。  
泉拓良氏（奈良大学）、金子裕之氏（奈良国立文化財研究所）、木下哲夫氏、田中良之氏（九州大学）、玉田芳英氏（奈良国立文化財研究所）、土肥孝氏（奈良国立文化財研究所）、豊田兼典氏（科学教育センター）、西健一郎氏（九州大学）、西田泰民氏（東京大学）、増子康真氏、松田真一氏（橿原考古学研究所）、松永幸男氏（鹿児島大学）（五十音順）
6. 本書遺構図中の方位は国土座標第VI系の座標北を使用し、標高は T. P. で表示した。
7. 遺構写真は各担当者が撮影し、空中写真は東日本航空株式会社が撮影した。遺物写真は高田充哲氏によるが、中世遺物の一部は田中が撮影した。
8. 本書の原稿執筆・実測図作成は各担当者が下表のとおり分担してこれに当り、編集は岩崎が行った。

第1章	岩崎	第3節	服部
第2章第1節	松尾	第4節	田中
第2節	岩崎	第4章第1節	松尾
第3章第1節	岩崎	第2節	岩崎
第2節	松尾・岩崎・服部		



# 目 次

第 1 章 調査の経過	1
第 2 章 立地と環境	
第 1 節 地理的環境	2
第 2 節 考古学的環境	7
第 3 章 調査の成果	
第 1 節 地区割及び層序	13
第 2 節 縄文時代	
1 遺構の概要	16
2 東微高地及びその周辺	18
3 中央微高地及びその周辺	48
4 西微高地及びその周辺	101
第 3 節 弥生時代	112
第 4 節 中 世	124
第 4 章 ま と め	
第 1 節 仏並遺跡出土の縄文土器	137
第 2 節 おわりに	144

# 押 図 目 次

第 1 図 横山盆地の地形と遺跡立地	3
第 2 図 仏並遺跡周辺地形図	5
第 3 図 調査区位置図	6
第 4 図 周辺遺跡分布図	8
第 5 図 地区割方法	14
第 6 図 調査区北壁土層図	15
第 7 図 遺構配置図	17
第 8 図 71-OD	20



第 9 图	71—OD 出土土器(1)	24
第 10 图	71—OD 出土土器(2)	25
第 11 图	71—OD 出土土器(3)	26
第 12 图	71—OD 出土土器(4)	27
第 13 图	71—OD 出土土器(5)	28
第 14 图	71—OD 出土土器(6)	29
第 15 图	71—OD 出土土器(7)	30
第 16 图	71—OD 出土石器	31
第 17 图	71—OD 出土円礫石器	32
第 18 图	73・74・78・79・81—OO	33
第 19 图	82—OO	34
第 20 图	82—OO 出土土器	35
第 21 图	84—OO 出土土器	35
第 22 图	84~88—OO	37
第 23 图	87—OO 出土土器(1)	39
第 24 图	87—OO 出土土器(2)	40
第 25 图	106—OO	42
第 26 图	120—OO	42
第 27 图	120—OO 出土土器(1)	43
第 28 图	120—OO 出土土器(2)	44
第 29 图	125—OO	44
第 30 图	146・153・158・159・164・165—OO	45
第 31 图	170・171—OD	46
第 32 图	158・165・170・171—OO 出土土器	47
第 33 图	475—OH	48
第 34 图	374—OD	49
第 35 图	193—OD 出土土器(1)	51
第 36 图	193—OD 出土土器(2)	52
第 37 图	193—OD 出土土器(3)	53
第 38 图	193—OD 出土土器(4)	54

第 39 图	193—OD 出土土器(5)	55
第 40 图	193—OO 出土石匙	56
第 41 图	193—OO 出土円礫石器	57
第 42 图	193—OO 出土石刀	58
第 43 图	354—OD	59
第 44 图	354—OD 出土土器(1)	60
第 45 图	354—OD 出土土器(2)	61
第 46 图	354—OD 出土敲石	63
第 47 图	374—OD 平面图	65
第 48 图	374—OD 内炉跡	65
第 49 图	374—OD 内埋甕	65
第 50 图	374—OD 出土土器(1)	66
第 51 图	374—OD 出土土器(2)	67
第 52 图	374—OD 出土土器(3)	68
第 53 图	374—OD 出土土器(4)	69
第 54 图	374—OD 出土土面	71
第 55 图	374—OD 内埋甕	73
第 56 图	374—OD 出土石器	74
第 57 图	194—OO	74
第 58 图	195—OO	75
第 59 图	196—OO	75
第 60 图	196—OO 出土土器	76
第 61 图	247—OO	77
第 62 图	247—OO 出土土器(1)	78
第 63 图	247—OO 出土土器(2)	79
第 64 图	253—OO	80
第 65 图	259—OO	80
第 66 图	353—OO	81
第 67 图	373—OO	81
第 68 图	375—OU	82

第 69 图	375—OU 棺用深鉢	82
第 70 图	375—OO 出土土器	83
第 71 图	375—OO 出土石皿	84
第 72 图	377—OO	84
第 73 图	378—OO	85
第 74 图	378—OO 出土土器	85
第 75 图	379—OO 出土土器	86
第 76 图	380—OO 出土土器	87
第 77 图	380—OO 出土石鏃	88
第 78 图	382—OO 出土土器	88
第 79 图	382—OO 出土石鏃	88
第 80 图	382—OO	89
第 81 图	387—OO 出土石皿	89
第 82 图	389—OO	89
第 83 图	391—OO	90
第 84 图	391—OO 出土土器	90
第 85 图	393—OU	91
第 86 图	401—OO	91
第 87 图	402—OO	92
第 88 图	402—OO 出土土器	92
第 89 图	407—OO	92
第 90 图	405—OO	92
第 91 图	405—OO 出土土器	93
第 92 图	406—OO	94
第 93 图	407—OO 出土土器	95
第 94 图	414—OO	95
第 95 图	414—OO 出土土器	96
第 96 图	416・418—OO	97
第 97 图	453—OO 出土土器	97
第 98 图	455—OO 出土土器	98

第99図	459—OO	98
第100図	中央微高地各遺構出土土器	99
第101図	484—OC	100
第102図	282—OO	101
第103図	283—OO	101
第104図	283—OO 出土土器	101
第105図	291—OO	102
第106図	318・330・315—OO	103
第109図	349—OO	104
第108図	450—OU	104
第109図	450—OU 出土円礫石器	105
第110図	318・330・349・385—OO 出土土器	105
第111図	包含層出土石器(1)	107
第112図	包含層出土石器(2)	108
第113図	包含層出土石器(3)	109
第114図	包含層出土磨製石器	110
第115図	弥生土器数量分布図	112
第116図	第I様式土器拓影	113
第117図	第II様式土器拓影	113
第118図	第III～IV様式土器拓影	113
第119図	第III～IV様式土器	115
第120図	第III～IV様式土器	117
第121図	第V様式土器拓影	119
第122図	弥生時代：石器	120
第123図	突帯文土器	120
第124図	第4層包含層内出土石器	122
第125図	弥生時代遺跡	123
第126図	4・8—OO 出土遺物 (1/4)	125
第127図	22—OO 出土遺物 (1/4)	127
第128図	32—OO 出土金属製品	128

第129図	42・43—00 出土遺物 (1/4) .....	130
第130図	55—00 平面、断面図 .....	131
第131図	55—00 出土遺物 (1/4) .....	131
第132図	63—00 平面、断面図 .....	132
第133図	63—00 出土遺物 (1/4) .....	132
第134図	包含層出土遺物 (1/4) .....	133
第135図	中世土壌断面図 .....	134
第136図	調査地区東部遺構 (中世遺構) 配置概略図 .....	135

## 図 版 目 次

図版 1	仏並遺跡周辺空中写真	図版12	153—00
〃 2	西微高地周辺空中写真	〃 13	120—00
	中央微高地周辺空中写真	〃 14	中央微高地遺構検出状況 (北より)
〃 3	中央微高地周辺空中写真	〃 15	193—OD 遺物出土状況
	東微高地周辺空中写真	〃 16	193—OD 遺物出土状況
〃 4	調査区全景 (東より)	〃 17	193—OD 床面ピット検出状況
	東微高地周辺 (東より)		193—OD 床面ピット完掘状況
〃 5	東微高地上遺構検出状況	〃 18	193—OD 中央ピット検出状況
	71—OD 検出状況	〃 19	374—OD 検出状況
〃 6	71—OD 遺物出土状況		374—OD 完掘状況
	71—OD 遺物出土状況 (細部)	〃 20	374—OD 内埋甕検出状況
〃 7	71—OD 遺物出土状況 (細部)		374—OD 内炉跡検出状況
〃 8	71—OD 完掘状況	〃 21	374—OD 炉跡断ち割り状況
	71—OD 内埋甕検出状況		374—OD 炉跡焼土下の小礫群
〃 9	71—OD 埋土断面 (南北断面)	〃 22	354—OD 完掘状況
〃 10	71—OD 埋土断面 (東西断面)		393—OU 検出状況
〃 11	東微高地検出土壌群	〃 23	416—00 検出状況
	82—00	〃 24	382—00 検出状況

	382—OO 掘削状況	図版 47	374—OD 出土土器
図版25	484—OC	〃 48	374—OD 出土土器
〃 26	西微高地から中央微高地 450—OU 検出状況	〃 49	196・238—OO 出土土器
〃 27	中世遺構検出状況	〃 50	247—OO 出土土器
〃 28	配石検出状況	〃 51	375—OU 出土土器
〃 29	63—OO 土器出土状況	〃 52	375—OU・378—OO 出土土器
〃 30	55—OO 土器出土状況	〃 53	379—OO 出土土器
〃 31	50—OO 埋土堆積状況 54—OO 埋土堆積状況	〃 54	380・382・402・407—OO 出土土器
〃 32	71—OD 出土土器	〃 55	405・414—OO 出土土器
〃 33	71—OD 出土土器	〃 56	195・391・453・455—OO 出土土器
〃 34	71—OD 出土土器	〃 57	各遺構出土打製石器
〃 35	71—OD 出土土器	〃 58	71—OD 出土円礫石器
〃 36	71—OD 出土土器	〃 59	各遺構出土円礫石器
〃 37	82・84—OO 出土土器	〃 60	各遺構出土石器
〃 38	87—OO 出土土器	〃 61	包含層出土打製石鏃
〃 39	87—OO 出土土器	〃 62	包含層出土打製石器
〃 40	120—OO 出土土器	〃 63	包含層出土打製石器
〃 41	120・158・165・168・170—OO 出土土器	〃 64	包含層出土打製石器
〃 42	193—OD 出土土器	〃 65	第4層出土弥生土器
〃 43	193—OD 出土土器	〃 66	第4層出土弥生土器
〃 44	193・354—OD 出土土器	〃 67	第4層出土弥生土器
〃 45	354—OD 出土土器	〃 68	第4層出土石器
〃 46	374—OD 出土土器	〃 69	4・8・42・55—OO 出土土器・ 32—OO 出土金属製品
		〃 70	63—OO、包含層出土土器
		〃 71	包含層出土土器



# 第1章 調査の経過

仏並遺跡は1973（昭和48）年に大阪文化財センターが大阪府土木部道路課の委託により実施した主要地方道枚方・富田林・泉佐野線（大阪外環状線）予定路線の河内長野・熊取間の分布調査により発見された<sup>(1)</sup>。それによると、榎尾川が形成する細長い氾濫原の上の河岸段丘上に位置し、東西約100m、南北約50mの範囲で遺物が散布し、遺物は須恵器と土師器が大半で弥生式土器と思われるものも若干あったと報告されている。

この調査結果により遺跡として周知されたのであるが、その後当遺跡にかかわる調査が行われたことはなく、遺跡の実態は不明の点が多かった。その間、外環状線は河内長野以北が開通し、河内長野・泉佐野間でも一部供用開始されたところもでてきた。さらに現大阪国際空港の公害問題をきっかけに泉州沖新空港計画が具体化し、その関連事業に外環状線が組み入れられることになった。一方、新空港関連事業にかかる膨大な遺跡の発掘調査を実施するに当っては多くの困難な問題が予想され、大阪府教育委員会文化財保護課では種々検討した結果、空港関連事業にかかる埋蔵文化財の調査を主目的とする財団法人大阪府埋蔵文化財協会を新設することになり、1985（昭60）年4月1日発足した。

仏並遺跡の発掘調査も新空港関連事業にかかる文化財調査の一環として当協会で実施することになった。仏並遺跡に関する知見は先の分布調査結果以外にはなく、それをふまえて府教委文化財保護課、当協会、府土木部道路課、鳳土木事務所の間で協議をかさね、その結果当協会は鳳土木事務所と昭和60年6月1日委託契約を締結し、6月25日現地における調査を開始した。事前に周辺地域を参考とし掘削深度を設計したが、調査を開始後、掘削土量が設計数量を大幅に上回ることが判明したので、大阪府土木部と協議のうえ、設計変更して調査を継続したが、包含層が厚いうえに遺物量が多く、また遺構の密度も高いため調査は難行し、11月23日ようやく現地における発掘調査を終了した。ひきつづき遺物整理作業を行ったが、出土遺物の量からみてすべてを整理することは不可能で、遺構出土遺物を中心に作業を進め、昭和61年3月31日事業を終了した。

---

(1) 財大阪文化財センター『主要地方道枚方・富田林・泉佐野線バイパス（大阪外環状線）予定路線内埋蔵文化財分布調査報告書』1973・3



## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

仏並遺跡は大阪府和泉市仏並町に所在する。和泉市は大阪府の南部、旧和泉国の中央やや北よりに位置し、北は泉大津・高石・堺の各市と、西は岸和田市と、東は堺・河内長野の各市と接し、南は和泉山脈を挟んで和歌山県と接する。

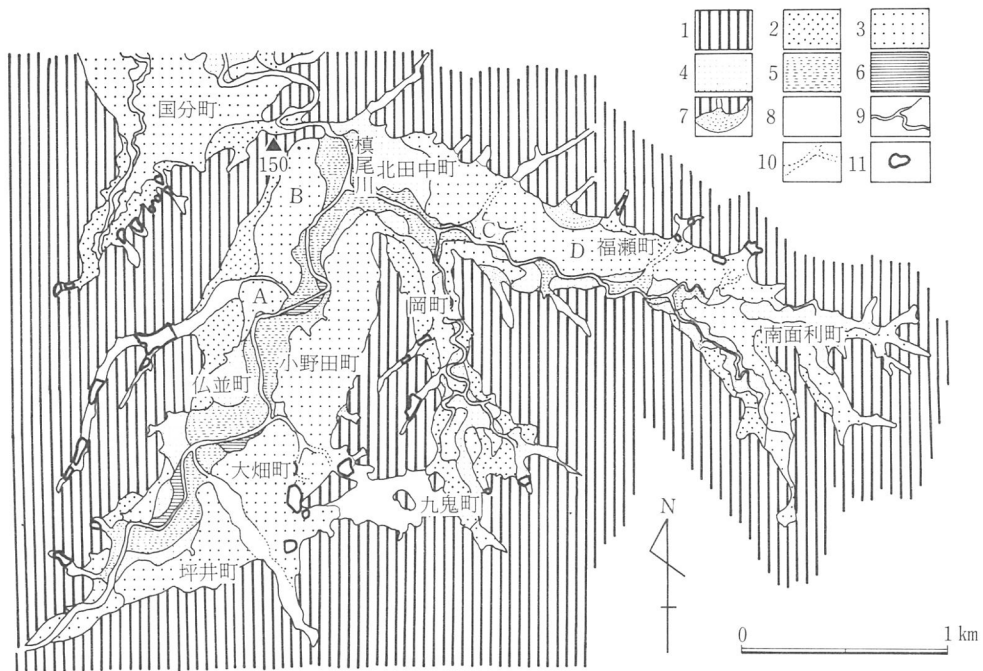
和泉地方はその南に和泉山脈が連なり、そこから大阪湾にむかって流れる河川によって、山地や丘陵が開析されている。そのため、和泉地方の各市町村は南東～北西方向に長くなっている。仏並遺跡の所在する和泉市も例外ではない。和泉市は市域のほとんどが和泉山脈から派生する支脈・丘陵地である。このような地形の南側を松尾川が、北側を槇尾川が開析し、狭小な谷底平野を形成する。市域の北西部は先の二河川が合流し、海岸平野へとつづく平坦地が広がる。この付近が旧和泉国の中心地で、国府が置かれていた。現在も和泉市の中核部として機能している。

松尾川によって開析された谷を松尾谷と呼ぶ。和泉丘陵の中を通り、谷幅は狭い。槇尾川によって開析された谷は池田谷と呼ばれ、信太山丘陵を含む泉北丘陵と、和泉丘陵を含む泉南丘陵とを境する。谷幅は広く、河岸段丘が発達している。池田谷のさらに上流には国分峠を境に横山谷と呼ばれる小さな盆地がひらける。

横山谷は山間の地でありながら旧河内国に近いことで、古くから交通の要衝であった。和泉府中から和田町を通り、国分峠をこえ、河内長野へ抜ける道は南河内地方と和泉との交通路として利用され、国分峠から仏並町・父鬼町・鍋谷峠をこえる道は和歌山と和泉との交通路として、また、国分峠・仏並町を通り、若樫町へ行く道は泉南地方への交通路として、そしてこれらの道は槇尾山施福寺への参詣路として利用された。このように横山谷は交通網が集中している所でもある。

仏並遺跡の所在する横山谷は槇尾川の上流和泉市の中核部より南東約9km離れた山間部である。この地域は国分峠を境に、下流域の池田谷とは隔絶した地形を呈する。

横山谷は大別すると西半の父鬼川流域と東半の東槇尾川流域に分かれる。前者は北々東から南々西の方向にのびる谷で幅約700～800m、長さ約2.5kmである。後者は前者と直角に交わり、西北西から東南東に向ってのび、幅はせまく500m以下で長さ約2.5kmである。ま



- |          |            |       |         |
|----------|------------|-------|---------|
| 1 山地・丘陵  | 5 沖積段丘面    | 9 河川  | A 仏並遺跡  |
| 2 中位段丘上面 | 6 氾濫原      | 10 浅谷 | B 横山遺跡  |
| 3 中位段丘下面 | 7 扇状地性低地   | 11 溜池 | C 福瀬西遺跡 |
| 4 低位段丘面  | 8 谷底平野(低地) |       | D 福瀬東遺跡 |

第1図 横山盆地の地形と遺跡立地

た両者の間に幅200~300mのせまい谷があり、坪井町から九鬼町をへて屈曲し北田中町につながる。

これらの谷にひろがる平坦面はほとんどが段丘であり、沖積面の発達が悪い。中位段丘上面は山地・丘陵の縁辺にあり、あまり顕著ではない。父鬼川流域では左岸の下宮町、仏並町付近に比較的広い部分がみられる。東横尾川流域では谷奥部に部分的にみられるのみである。岡町から九鬼町にかけてのせまい谷は標高も高く中位段丘上面が多く部分を占める。丘陵部とともに果樹園として利用される場合が多い。

中位段丘下面是谷内平坦地のうち最も広い面積を占める。父鬼川流域では右岸の大部分がそれであり、左岸では主として北半に分布している。東横尾川流域でも右岸の大部分は中位段丘下面である。左岸は、東横尾川が谷の南に扁して流れているため段丘はあまりみ

られない。水田または果樹園として利用されている。

低位段丘は中位段丘の前面に部分的にみられる。面積としては大きくない。父鬼川流域の南半や、父鬼川・東槇尾川合流点の北田中町付近に比較的広い部分がみられる。

沖積段丘は河川にそって分布しているが、東槇尾川流域には少ない。父鬼川流域から東槇尾川との合流点付近までは比較的ひろく分布している。下位段丘面と沖積段丘面はほとんど水田として利用されている。

氾濫原は父鬼川流域にわずかにみられるのみである。これも現在は水田になっている場合がほとんどである。

以上の主要な谷の他に、山地・丘陵には多くの谷が樹枝状に入り込んでいて、溜池が築造されたり、谷水田として耕作されていたりする。その前面には扇状地性低地が形成される場合もある<sup>(1)</sup>。

仏並遺跡は父鬼川左岸の下宮町から仏並町にかけてつらなる中位段丘下面の南端部に所在する。この面の西には約7～8mの段差をもって中位段丘上面があり丘陵へと続く。東・南は比高約5mの段丘崖があり沖積段丘になる。西の丘陵からの谷がこの中位段丘下面の南約4分の1のところを横切っている。仏並遺跡はこれらの段丘崖や開析谷によって画された中位段丘下面上の東西・南北約200mの範囲に広がっているとみられる。今回の調査地はこの広がり南部を幅20m、長さ150mにわたって東北東から西南西の方向で横切る。

横山谷で知られている遺跡は仏並遺跡の他に現在3箇所が知られている。仏並遺跡の約500m北の同じ中位段丘下面上に横山遺跡<sup>(2)</sup>があり弥生時代の遺物が知られている。東槇尾川流域では、中位段丘下面の福瀬東遺跡で弥生～古墳時代の、低位段丘面の福瀬西遺跡<sup>(3)</sup>で奈良時代頃の遺物が採集されている。

---

(1) 地形分類については科学教育センター豊田兼典氏の教示を受けるとともに、地形分類図の提供を受けた。記して感謝します。

(2) 1972年府教委調査

(3) 大阪文化財センター『主要地方道枚方、富田林、泉佐野線バイパス（大阪外環状線）予定路線内埋蔵文化財分布調査報告書』1973



第2図 仏並遺跡周辺地形図



第3図 調査区位置図

## 第2節 考古学的環境

仏並遺跡が立地する横山谷は前項にあるように山地と丘陵に囲まれたせまい谷間であるが、同時にいくつかの峠により和泉・河内・紀伊を結ぶ交通の要衝であった。従ってそこに成立した諸遺跡は周辺地域の遺跡と無関係ではあり得ない。以下横山谷をめぐる諸地域の遺跡を時代順に概観し、その中で横山谷の占める位置をみてゆきたい。

旧石器時代のうち最古のものとして堺市野々井遺跡のルヴァロワ型石核が知られているが、遺跡数が増加するのは国府文化期であり、大津川・石津川流域の丘陵・段丘を中心に10個所前後の遺跡がある。国府文化期以後は遺跡数は一時減少するが、有舌尖頭器の出土例はかなり多い。いまのところ土器を伴ったものはないが、やはり10個所程度の遺跡が知られている。横山谷では父鬼（大床）遺跡で国府文化期よりやや新しいとみられる石器群が22点出土している。標高420mの山頂のやや下の斜面で、標高390mの地点の奈良時代須恵器包含層の下の黄色粘土層から出立した。また横山谷から父鬼川沿いに登りつめた鍋谷峠から尾根伝いに約3km西の葛城山頂でも国府型ナイフ形石器が採集されている。いずれも断片的な採集資料であり遺跡の内容は不明であるが、ともに山頂あるいは山頂からやや下った傾斜地であり特異な立地条件を示す。

縄文時代も中期末まで遺跡の数は少ない。早期末から前期初頭の土器が堺市太平寺遺跡で出土している。前期では北白川II a式が同じ太平寺遺跡で、大歳山式土器が堺市平井遺跡で出土している。中期の遺跡として岸和田市春木八幡山遺跡が著名であり中期中葉から晩期まで続く。他に岸和田市箕土路遺跡で鷹鳥式土器が出土し葛城山頂遺跡では船元式土器が出土している。ところが今回の仏並遺跡の調査により早期の繊維土器が出土し、今のところ泉州北部地域では最古の縄文土器である。しかしこれも遺物として数10片の土器片と、遺構として土壇1基にその可能性が考えられるのみで断片的資料の域を出ない。このように泉州地方では縄文時代創草期から中期まで遺跡の数は少ない。

中期末・後期初頭以後泉州一帯では遺跡数が急増し、各河川流域ごとに遺跡群が形成される。そして淡輪遺跡でみられるように竪穴住居数棟からなる集落も出現するようになる。こういった情勢は横山谷に及び、今回検出したように仏並遺跡の集落が出現した。この時期になると、各遺跡群のなかに土器型式の数型式にわたって連続する中心的遺跡と単独型式のみ出土する一時的なものが現れる。石津川・和田川流域では、両川合流点を中心に数遺跡があり、西浦橋、太平寺遺跡では中・後・晩期にわたる土器が出土するが量的に少な



第4図 周辺遺跡分布図

1 大園遺跡	30 野々井遺跡	59 堂ヶ峯廃寺跡
2 上町遺跡	31 牛石古墳群	60 神ノ木山遺跡
3 貝吹山古墳	32 深田橋遺跡	61 神於おぐら谷遺跡
4 池上遺跡	33 伏尾遺跡	62 神於寺跡
5 七ノ坪遺跡	34 陶器千塚古墳群	63 内畑城跡
6 豊中遺跡	35 陶器遺跡	64 大沢城跡
7 伯太北遺跡	36 辻之遺跡	65 神福寺跡
8 伯太遺跡	37 田園遺跡	66 転法輪寺跡
9 府中遺跡	38 和気遺跡	67 勝福寺跡
10 和泉寺跡	39 寺門古墳群	68 松尾寺跡
11 信太山千塚古墳群	40 観音寺山遺跡	69 三林古墳群
12 丸笠山古墳	41 池田寺跡	70 三林遺跡
13 狐塚古墳	42 万町北遺跡	71 黒石古墳群
14 禅寂寺（坂本寺）跡	43 万町遺跡	72 和泉国分寺跡
15 惣ノ池遺跡	44 摩湯山古墳	73 横山遺跡
16 上代遺跡	45 マイ山古墳	<b>74 仏並遺跡</b>
17 和泉黄金塚古墳	46 田治米宮内遺跡	75 福瀬西遺跡
18 観音寺（信太寺）跡	47 三田遺跡	76 福瀬東遺跡
19 鶴田池東遺跡	48 岡山遺跡	77 槇尾山施福寺
20 西浦橋遺跡	49 どぞく遺跡	78 父鬼（大床）遺跡
21 菱木下遺跡	50 土居城跡	79 天野山金剛寺
22 万崎池遺跡	51 稲葉城跡	80 滝尻弥勒堂跡
23 太平寺遺跡	52 稲葉墓地	81 清水阿弥陀堂跡
24 山田古墳群	53 宮山遺跡	82 陶邑古窯跡群谷山池（TN）地区
25 山田遺跡	54 貝足遺跡	83 陶邑古窯跡群大野池（ON）地区
26 菱木銅鐸出土地	55 西方寺遺跡	84 陶邑古窯跡群光明池（KM）地区
27 野々井古墳	56 長光寺跡	85 陶邑古窯跡群梅（TG）地区
28 二本木山古墳	57 山直神社遺跡	86 陶邑古窯跡群高蔵寺（TK）地区
29 桧尾塚原古墳群	58 山直墓地	87 陶邑古窯跡群陶器山（MT）地区

い。下流の四ツ池遺跡でも中期末から晩期にわたる土器が出土するが、全時期同じように出土することはなく、石津川・和田川流域では後期中葉から末の土器は少なく、晩期でも増加するのは終末の突帯文土器の時期からである。

上記の遺跡群の南に槇尾川・大津川流域の遺跡群があり、仏並遺跡が所在する横山谷は槇尾川流域の最上部の平坦地である。これまで知られている遺跡は下流の両川合流点付近の低位段丘やその近くの砂丘上に立地する。砂丘上に立地するものとして春木八幡山遺跡があり、中期末にはじまり後期中葉の土器が最も多く断続的に晩期末まで続く。この流域



でも中期末に出現するものが多いが、石津川・和田川流域より少ない。槇尾川中流域では遺跡数は多くないが、万町北遺跡で中期末～晩期の土器が出土しており、仏並遺跡に最も近接した縄文時代遺跡である。この流域でも後期後葉から遺跡は減少し、再び増加するのは突帯文土器の時期からである。

弥生式土器出現直前の突帯文土器の時期になると、泉州地方では再び遺跡数が増加する。石津川・和田川流域では西浦橋遺跡で長原式の土壌墓群が検出されていて、付近に集落が営まれたと考えられる。この時期にはすでに水稻農耕が始まっている可能性があるが、この遺跡では水稻農耕の直接の痕跡は今のところ検出されていない。しかし、鈴の宮や四ツ池でもこの時期の土器は多く、一般的に晩期中葉以前に比べるより低地に立地するという傾向は指摘できる。

大津川・槇尾川流域でも虫取・春木八幡山・府中・万町北等で突帯文土器が出土している。仏並遺跡でも数点の突帯文土器が包含層から出土しており、槇尾川最上流まで突帯文土器が及んでいることが知られる。

弥生時代前期の遺跡はまず海岸部に出現する。石津川下流域では四ツ池遺跡でⅠ様式古段階の土器があり以下後期まで連続するこの地域の拠点定集落である。これまでの調査で3ヶ所の居住域と2ヶ所の墓域が検出されている。四ツ池周辺では前期末までに浜寺黄金山、浜寺元町、石津等の遺跡が出現するがその実体は十分明らかではない。中期になるとさらに遺跡が増加するが、後期まで続くものは少ない。

大津川流域では池浦遺跡がⅠ様式中段階に出現するが中・後期に続かない。それにかわるように池上遺跡が前期後半に出現し中期には巨大な環濠集落として発展する。中期には池上遺跡をめぐって伯太北、府中、虫取、和気等の遺跡が出現する。池上遺跡では後期になると環濠は埋まるが集落として存続する。池上以外の遺跡は後期まで続かない。

中期になると海岸部以外に、各河川中・上流域の段丘上にも遺跡が出現する。石津川・和田川合流点付近の段丘上にはいくつかの遺跡が成立した。鈴の宮遺跡では方形周溝墓10数基他からなる墓域が検出された。また和田川右岸の西浦橋遺跡から菱木下遺跡にかけて、竪穴住居3棟、掘立柱倉庫1棟、方形周溝墓9基が発掘された。西浦橋遺跡では河川の屈曲部をせきとめる「シガラミ」が検出され、当時の農耕技術の一端を示している。これらの遺跡では前期の土器も断片的ながら出土していて、この地域でも前期の遺跡が発見される可能性は大きい。

横山谷地域では、弥生前期前半の遺物は現在まで明らかでない。前期末以降では今回の調査

でⅠ様式末～Ⅴ様式の土器が出土したが、包含層出土の遺物だけであり遺構はない。また仏並遺跡の約600 m北東にある横山遺跡でも1972年校舎増築工事に伴い府教委が調査して弥生時代中期を中心とする遺物が出土したらしいが未報告であるためその詳細はわからない。この調査の際、出土した石鏃には形態からみて縄文時代に属するとみられるものもあったという。その他外環状線路線の分布調査により、福瀬東遺跡で弥生～古墳時代の土器が採集されている。

このように海岸部にまず定着した農耕集落は前期から中期にかけて順調に発展していったようであるが後期になると集落の立地や形態が変化しており、ひとつの転換期を迎えたようである。

後期になるとこれまで述べてきた地域では遺跡数が減少するとともに遺跡の小規模化がみられる。また丘陵上にいわゆる高地性集落が出現する。榎尾川左岸の観音寺山遺跡は海拔約65m、低地との比高約40mの丘陵上にあり、103棟の竪穴式住居跡があった。そして、そのまわりを二重のV字溝がめぐらされている。観音寺山遺跡の北約2.5kmの信太山丘陵上の惣の池遺跡も後期の高地性集落で、V字溝の存在は不明であるが竪穴住居跡7棟以上が検出されている。

銅鐸は和泉では9例知られており、外縁付鈕式から扁平鈕式のものほとんどで、突線鈕式も2例知られている。横山谷に最も近いものは神於山出土の外縁付鈕式流水文銅鐸であり、榎尾川下流周辺では池上遺跡で突線鈕銅鐸片が出土し、菱木出土の銅鐸は突線鈕のなかでも最新のものである。

古墳時代になると、高地性集落は廃絶し、再び平野部に集落が形成される。榎尾川下流から石津川流域にかけて府中、和気、上町、七ノ坪、豊中、野々井、四ツ池、小坂、鈴の宮等の遺跡で庄内一布留式土器を伴う集落が検出される。さらに大園遺跡等で見られるように5～6世紀代には竪穴住居址に加えて掘立柱建物からなる集落が出現してくる。掘立柱建物への転換は各地域により異なるようであり、最近調査された三田遺跡では6世紀前半に竪穴住居址群があり6世紀後半から7世紀初頭にかけて掘立柱建物の集落が営まれている。

古墳の築造は海岸部では4世紀末にはじまり信太山丘陵北端の和泉黄金塚、同西北部の丸笠山、松尾川左岸の和泉最大の前期古墳である摩湯山古墳等がある。黄金塚、丸笠山古墳にはじまる地域首長の系譜は6世紀代までたどれることが指摘されている。6世紀後半になると首長墓の系列はとだえ、新たに信太山千塚のように群集墳が出現している。

4～5世紀代を通じて古墳が築造されなかった内陸の谷地形の地域にも群集墳がつくられ6世紀後半には池田谷の三林、黒石古墳群、松尾谷の唐国池田山、ウトジ池古墳群などが知られている。また5世紀後半からは泉北丘陵一帯では須恵器生産が大規模に行なわれ、これらの古墳群がその生産体制と何らかのかかわりを持っていたことは言うまでもない。

一方横山谷においては福瀬東遺跡で古墳時代の土器が採集されたことが報告されているのみであり、古墳の築造はこれまでのところ知られていない。今回の調査でも古墳時代の遺物は出土しなかった。

古墳の築造がおわり奈良時代になると、泉州地方においても寺院の建立が盛行する。和泉国府周辺から池田谷にかけて和泉寺、阪本寺、池田寺、安楽寺（国分寺）等があり松尾谷には松尾寺がある。寺院以外では万町北遺跡、池田寺遺跡等で奈良時代の集落が検出されている。

横山谷においては福瀬西遺跡で奈良時代の須恵器が採集され、旧石器が出土した父鬼遺跡の上層でも奈良時代の須恵器が出土しているが断片的資料の域を出ない。奈良時代には槇尾寺が成立したことが伝えられているが、横山谷の集落については明らかでない。行基年譜に横山杣として出てくるように林業を基盤とする小規模な集落が成立していたのであろうか。

古代末～中世の考古学資料としてはこれまでは槇尾山経塚が知られていた。平安時代末から室町時代にいたる多数の埋経が行なわれたらしい。1962年石田茂作氏らの調査により経筒外容器（石製・陶製）、経筒、銅鏡、水滴、花瓶、小壺、合子等多数の遺物が出土した。今回の調査でも13～14世紀を中心とする瓦器やその他の土器・陶器が出土し、土壇墓群と思われる遺構を検出した。

横山谷内の古代以降の歴史については文献史学の立場からまとめられており、ここでは省略するが、文献として残されたものは槇尾寺領荘園関係のもの等に限られ、地域内の開発、集落の動態等今後考古学的に解明すべき課題は多く、今後の調査・研究に期待したい。<sup>(1)</sup>

---

(1) 本稿作成にあたっては下記の文献を参照した。個々の遺跡の調査報告書は煩雑なため省略した。

大阪府史編集専門委員会『大阪府史』第1巻1978

和泉市史編纂委員会『和泉市史』第1巻1965

和泉丘陵遺跡分布状況調査会『和泉丘陵遺跡分布調査報告書』1977

大阪文化財センター『松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書』I・II1984

大阪府教育委員会『和泉横山谷の民俗』I 1975

## 第3章 調査の成果

### 第1節 地区割及び層序

発掘調査区は第VI座標系により4m×4mに区画し、それぞれに名称をつけた。区画名のつけ方は当協会の調査規定に基づき次の手順による。仏並遺跡が所在するのは大阪府発行の1/2,500地形図の「大C-5-13」図郭内にある。図郭内は12等分して500m×500mの区画をつくりA-Lの記号をつける。500m×500mの区画を25等分して100m×100mの区画をつくり01～25の二桁の数字で示す。100m×100mの区画は4mの方眼で625等分し二文字のアルファベットで示す(第5図)。仏並遺跡の今回の調査区は大C-5-13-G19・G20・H16区にあたる(第3図)。

堆積した土層は地区により微妙に異なるが、巨視的にみると以下に示すような基本層序になる。遺構面は調査区東部で第4層上面に部分的に中世遺構面が検出できた他は、地山面で縄文時代の遺構面を検出したのみである。

第1層 現代の耕土であり、厚さ20～30cmである。色調は灰色ないし暗灰黄色である。

上面の標高は西端が約123.8mで、東に向って階段状に下降し、東端では121.9mになる。

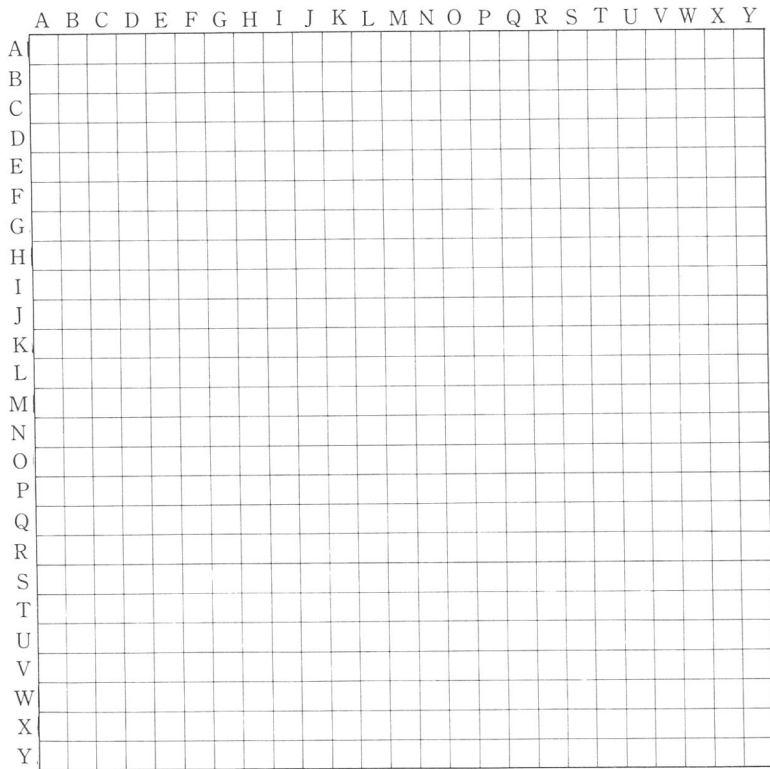
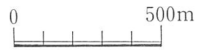
第2層 黄褐色を基調とするやや粘質の床土で、厚さ5cm前後である。

第3層 床土下の暗灰黄色土で、下部には厚さ1～2cmの黄褐色土が床土状に堆積していて、旧耕土とみられる。縄文時代から中世にいたる幅広い時期の遺物を含んでいるが、中心をなすのは中世の遺物で、調査区東部ではこの層の下面で中世の遺構を検出した。またG-20区の東半ではかなりの弥生式土器片も含んでいる。弥生式土器は次の第4層からも縄文土器に混じって出土している。

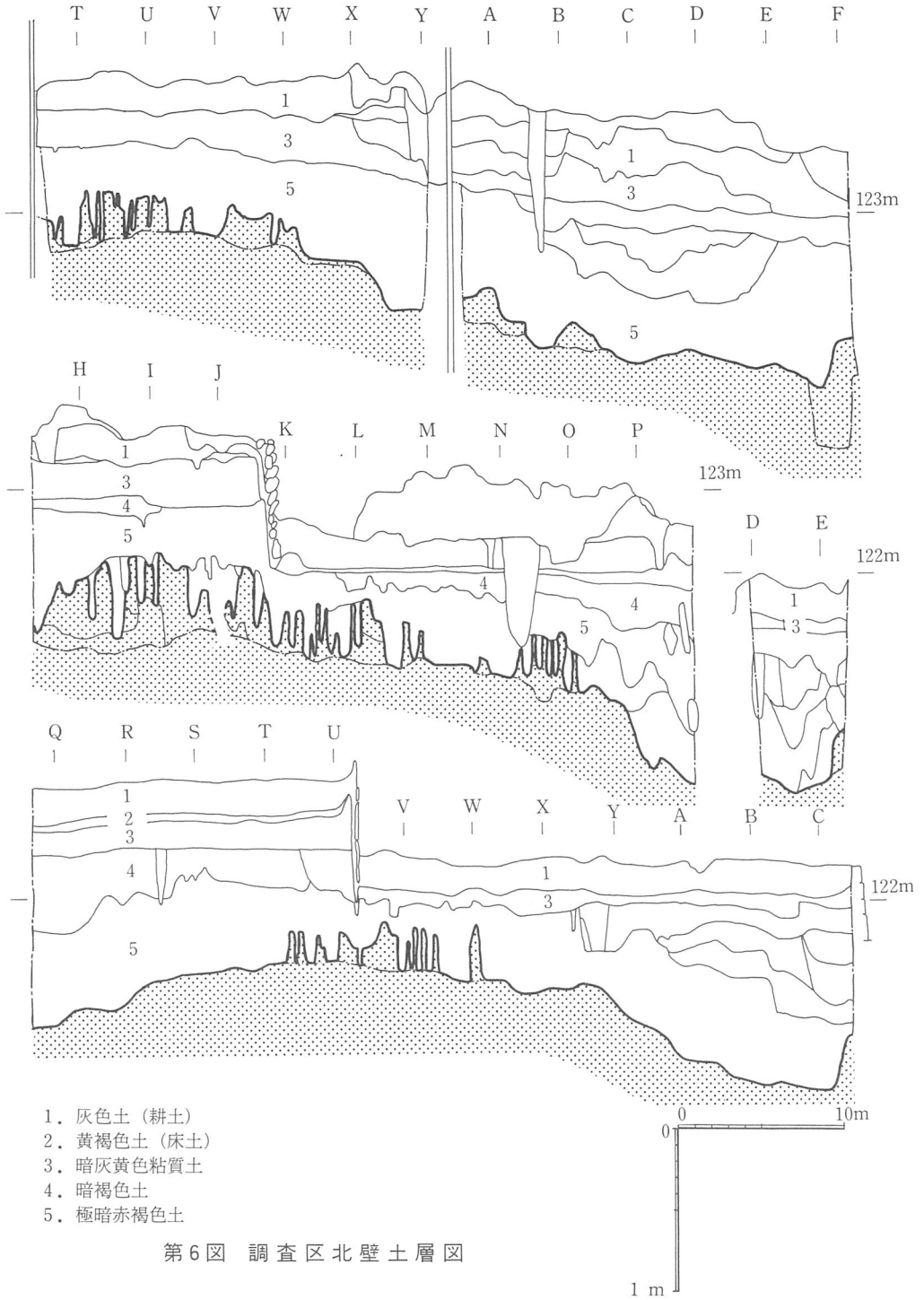
第4層 厚さ20～50cmの砂礫を混じえる暗褐色土層で、主として調査区の東半部に存在する。縄文・弥生時代の遺物を包含する。弥生式土器が出土するのは限定された範囲に限られる。

第5層 縄文時代の包含層で、暗褐色を基調とする砂礫混じりの土層である。厚さ70cmから厚いところでは80cmに及び、細分を試みたが明確に分層することは困難であった。この層の下は地山の黄褐色砂礫である。地山面はゆるい起伏があり、

A	B	C	D
E	F	01 02 03 04 05	01 02 03 04 05
		06 07 08 09 10	06 07 08 09 10
		11 12 13 14 15	11 12 13 14 15
		16 17 18 19 20	16 17 18 19 20
		21 22 23 24 25	21 22 23 24 25
I	J	K	L



第5图 地区割方法



西・中央・東の3個所に周囲よりやや高い微高地があり、その標高はそれぞれ122.5～123.1m、122～122.6m、121.5～121.8mである。また西微高地と中央微高地の間の低地の最低部は121.9m、中央微高地と東微高地間の最低部は121.2mになる。

## 第2節 縄文時代

### 1. 遺構の概要

仏並遺跡が立地するのは、すでに述べたように、槇尾川左岸の中位段丘下面上であり、その南端部の小さな開折谷以南の東西・南北約200mの平坦面上である。今回の調査区はそのなかでも南に扁した位置にあり、東北東～西南西の方向の幅約20m、長さ約150mの範囲である。調査区全域で地山（縄文時代遺構面）上に暗褐色～黒褐色を呈する厚い包含層が存在した。この包含層がどこまで分布しているか現状では不明であるが、調査区の北約120mの地点でたまたま井戸掘削工事があり、その際の所見では包含層はみとめられなかった。従って遺跡の北限は平坦面北端の開折谷まではひろがらない可能性が大きい。

包含層を除去すると、黄褐色砂礫層の地山面に達する。この層はあまり固結してなく、非常にもろい。縄文時代の遺構はこの層に掘り込まれているためかなり原状から変化していることが考えられる。層内には多量の円礫が含まれている。すべて砂岩か礫岩で、拳大から人頭大あるいはそれ以上の大きさのもので、なかには風化して「ひびわれ」を生じているものも含む。包含層にも多量の円礫を含んでいた。そのほとんどは地山から供給されたものと考えられる。そのなかで明確な使用痕をもつもののみを石器としてとり上げたがそれでもかなりの量に達した。

地山の上面はゆるやかな起伏をもち、調査区の東端・中央・西端は周囲よりやや高い微高地となり、主要な遺構はその微高地上にある。

東微高地は東端はこの遺跡が立地する下位段丘の段丘崖に接し、そこから東へ約30mの範囲であるが、西の低地との境目は明確でなく漸移的に移行する。東端の段丘崖に接する地点に住居址（71-OD）がある。この住居址の北に接して、71-ODに切られる落込みがあり、住居址の可能性を考えられたが、調査の結果住居址である確証は得られなかった。71-ODの南から西南にかけてピット群がある。ピット群はもう1個所、微高地の西北部にもあるが、その性格は明確ではない。住居址の西約5mの地点には土壌が数基切合った部分があり、そのなかの87-00は深さ約1.15mもあり、貯蔵穴であるかもしれない。土壌はそれ以



第7図 遺構配置図



外に微高地の中央部から西の低地にかけて40～50基が存在する。長さ1.2～1.5m 前後の楕円形ないし卵形を呈するもの、径1m 前後の円形のもの、不整形のものなど様々である。楕円形ないし卵形のは、中に石組があるもの(153-00)があり、主軸の方向も直交する二方向に分かれるような傾向があり、土壌墓である可能性が考えられる。個々の土壌の性格を限定することは困難である。

中央微高地は東西40～50m で、低地部への移行は両端とも漸移的である。住居址4棟、土器棺墓、土壌、ピット群などがある。住居址は微高地の中央部に193-OD と374-OD がある。このうち374-OD は2棟が切合っていると考えられるが、切合関係を検出することができなかった。193-OD と374-OD の間は最小2.5m しか離れていなくて、この3棟のうち2棟が同時存在した時期があった可能性はうすい。微高地西端にもう1棟の住居址(354-OD)がある。中央の住居址群から西南に15～16m はなれている。中央の3棟の住居址付近から東にかけて無数のピット群がある。住居址の床面が削平され柱穴のみ残ったものかもしれないが明確でない。中央の住居址付近には埋葬址も検出された。土器棺墓2基(375・393-OU)の他いくつかの土壌墓がある。土壌墓のなかには382-OU のように標識とみられる配石をもつものがある。微高地の東西の縁辺から低地にかけては多くの不定形土壌がある。特に東半部に多く検出された。また東側の低地部には塊石を中心に礫を敷いた遺構(484-OC)があり祭祀遺構かと思われた。

西微高地は調査区西端から約30m の範囲である。ここでは住居址は検出されなかった。調査区南壁の西端付近に土器棺墓(450-OU)がある他は土壌・ピットが散在している。その個々の性格を明らかにすることは困難であるが、土器棺墓の存在からみてなかには土壌墓があるであろう。長さ1～1.5m の楕円形のもはその可能性が考えられる。中央微高地との間の低地にも土壌群が分布している。この点は東側の低地とは異なる点である。しかしこの部分は遺物の出土量は少なく、遺物を含む遺構も少なかった。

遺構の種類は当協会の調査規定により次ページの表の記号を使用する。遺構名は検出順に番号をつけ、番号の後ろに遺構の種類記号をつけて表す。以下の記述にあたっては、住居跡のみ各項の最初におき、それ以外は遺構の種類にかかわらず番号順に記載した。

## 2. 東微高地及びその周辺

**71-OD** 調査区東端で検出された竪穴住居址である。検出面は黄褐色砂礫層上面に当る。不整形な楕円形を呈し、東西5.90m、南北5.10m を削る。西から東へ傾斜する斜面に位置するため東側は極めて遺存状態が悪い(第8図、図版5～10)。

道路	OA	Avenue	土器溜、瓦溜	OT	Trash
建物	OB	Building	井戸	OW	Well
竪穴住居	OD	Dwelling	苑池	OY	Yard
土塁・石塁	OE	Earth work	水田・畑	OZ	
柵・塀	OF	Fence	祭祀	OC	Ceremony
炉	OH	Hearth	窯	OK	Kiln
水利施設	OI	Irrigation	池・沼	OL	Lake
土壙	OO	Orifice	貝塚	OM	Midden
ピット	OP	Pit	墓地	OG	Grave
河川	OR	River	埋葬施設	OU	Urn
溝	OS	Stream	その他、不明	OX	Extra

床面は脆弱な地山面であり、礫等による凹凸があるにも拘わらず貼り床等は認められない。

西壁残高26cm、傾斜角33度、南壁残高20cm、傾斜角64度、北壁残高30cm、傾斜角24度を測る。本住居址の平均壁残高25.0cm前後と極めて残りが悪く廃絶後の時間の経過が考えられる。壁の傾斜角度は60度前後と思われる。

埋土は円礫等を多く含み不明な点も多いがレンズ状の堆積をなすものと考えられる。上層より第I層、黒褐色シルト、第II層灰色含む黒褐色シルト、第III層、黄褐色砂層である。

柱穴と考えられるものはハケ所検出されており、各々の規模は次の通りである。

462—OP 南北70.0cm、東西60.0cm、深さ19.0cm

463—OP // 56cm、 // 60cm、 // 13cm

467—OP // 52cm、 // 49cm、 // 13cm

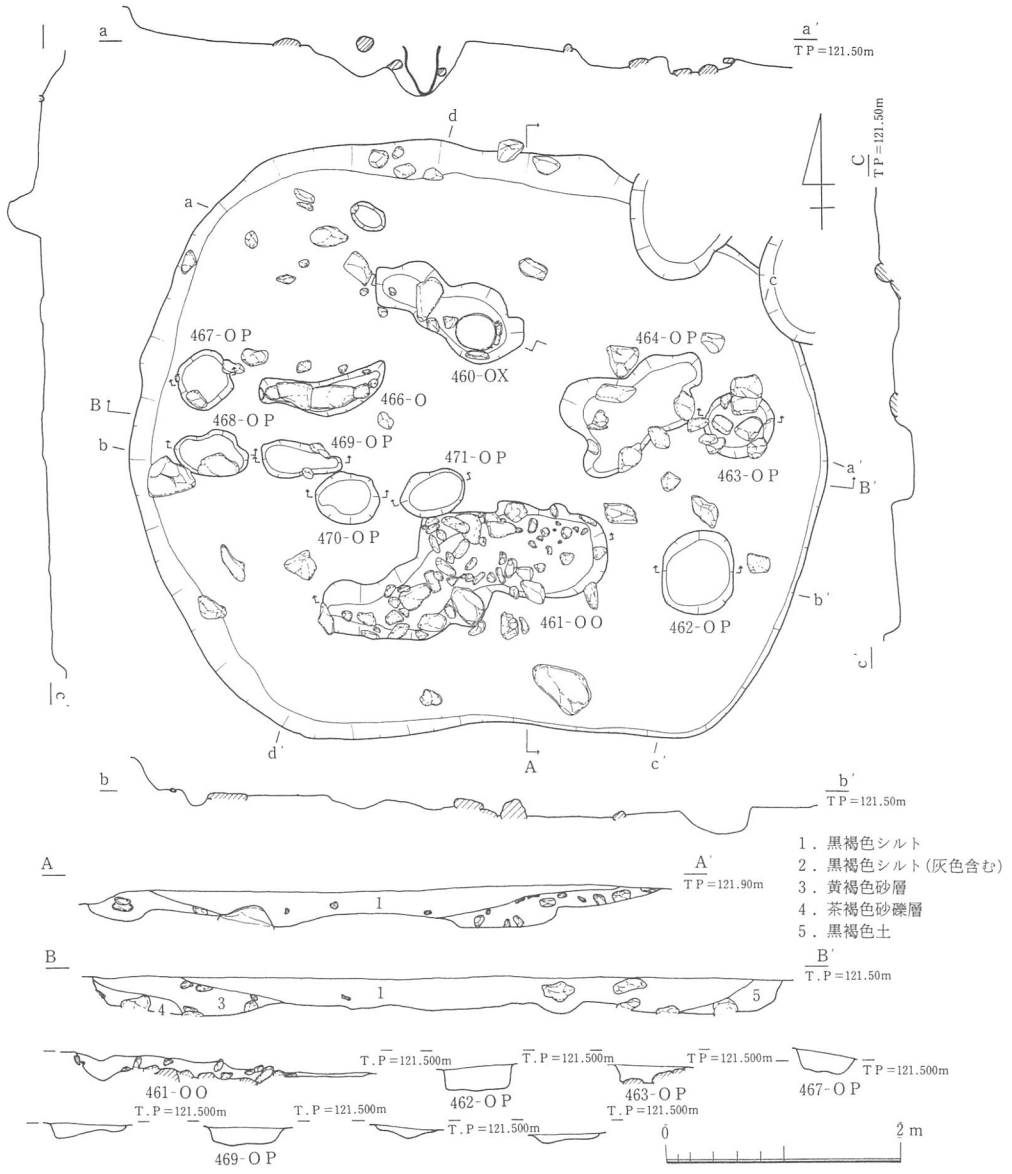
468—OP // 40cm、 // 63cm、 // 5cm

469—OP // 33cm、 // 48cm、 // 14cm

470—OP // 54cm、 // 45cm、 // 9cm

471—OP // 41cm、 // 52cm、 // 8cm

これら71—OD内で検出されたハケ所の柱穴は、60cm前後のものと45cm前後のものに大きく二つに分類することができ、重複、或は増築等も十分想定される。東壁部分などに不明な点も多く、出土遺物のさらに詳細な検討を待ち、ここではその可能性を指摘するにと



第 8 図 71-OD 実測図

どめたい。

461—OO は床面中央よりやや南寄りで検出された土壌である。床面より約13cm掘り込まれている。上層よりわずかではあるが、焼土が検出されており、炉の機能をはたしたものと思われる。焼土内及びその周辺においても遺物の出土は認められない。

460—OX は71—OD 北壁付近で検出された埋甕である。底部中央をわずかに欠く、ほぼ完形の深鉢形土器を使用している。埋甕は床面より掘り込まれた土壌内に正位状態で埋納されている。又、使用された深鉢形土器の最大径付近に支えとして掌程度の礫4個を置き安定させている。

貯蔵穴など、その他住居址に付属する施設は検出されていない。

71—OD より出土した遺物の大半は住居址中央部の覆土より検出されたものであり、床面炉跡等からは、ほとんど検出されなかった。従ってこれらの遺物は、本住居址の廃絶後の時期を示すものと思われる。

この遺構からは遺構廃絶時に一括投棄されたような状況で、多量の土器が出土した。土器の量はコンテナ箱で約30箱にもおよぶ。その中には縄文時代早期に遡ると考えられる繊維土器も数点混っているが、他の全てが縄文時代後期前半に位置するものである。今回は時間的な制約があったため、全てを図化できず、図示したものも、この遺構を代表しうるものか確信はないが、大型の破片を抽出して図示した。他のほとんどの土器は次の機会に紹介することにする（第9～15図、図版32～36）。

深鉢（①～⑤） ①は口縁部が内側に肥厚し、上端面にやや凹んだ平坦面をもつ。その一部に橋状の突起をもつ。突起は橋状になる部分と環状にしたものを組み合わせている。丸くふくらむ胴部には下に開く「U」字状の平行沈線文とそれをつなぐ沈線文を描き、そのあと RL の縄文を施す。②は①と同様の器形を呈する土器で、口縁部も内側に肥厚するが、①より肥厚が小さい。胴部には渦文が硬直化した文様を描き、その外側に LR の縄文を充填する。③はやや胴が長い器形を呈する。口縁端部は小さく肥厚し、上端面に LR の縄文を施す。胴部には沈線で逆「L」字状の区画文を描き、外側に LR の縄文を施す。縄文の一部は二枚貝条痕で消えている。④は胴部の沈線文が多重のものである。頸部と胴部を区切る沈線も3条描かれる。沈線文帯の間には LR の縄文を施す。⑤は波状口縁を呈する土器で、波頂部には二重の渦文を描き、左右に弧状沈線を配する。波頂部と波頂部の間には長方形の区画文を描く。波頂部下の頸部には「V」字状に突帯を貼付け、棒状の原体で刻みを施す。胴部には多重化した沈線文を描き、沈線文帯の間に LR の縄文を施す。⑥は胴部破片で

ある。頸部には⑤と同様の「V」字状)刻み目突帯をもつ。頸部と胴部の境にも刻み目突帯を貼付けている。頸部の突帯と横方向の突帯の接点には粘土瘤を貼付け、粘土瘤の上下を刺突している。胴部の文様は多重化した沈線文とLRの縄文である。⑦も胴部破片である。太い蛇行沈線文とRLの縄文で文様を描く。⑧は波状口縁を呈し、波頂部には刺突文、円形沈線文、弧状沈線文を描く。波頂部間には1条の沈線を描く。胴部には渦文とそれを囲む連弧文を描く。⑨も波状口縁を呈する土器である。波頂部には円形の沈線文を描きその左右に弧状沈線文を連結させる。また波頂部と波頂部の間にも円形の沈線文を描いている。胴部には4条単位の垂下条線文を描く。⑩は口縁部にRLの縄文を施し、頸部から胴部にかけて蛇行する垂下条線文を描いている。⑪は口縁部にRLの縄文を施し、胴部には垂下条線文を描くもので、頸部の一部にも垂下条線文を描く。⑫は山形になる波頂部をもつもので、口縁部文様帯胴部文様帯に同一のRLの縄文を施すものである。⑬、⑭は無文土器である。⑭は波状口縁を呈する。口縁部は内側に拡張させ、上端面に太い沈線を描く。⑮は埋甕として使われていた土器である。外面は巻貝条痕調整で、底部には径約12cmの円孔が穿たれている。

鉢(⑯～⑰) ⑯は口径13.5cmを測る小形の土器で、器面の四箇所沈線による区画文とLRの線文を描く。区画文は横位の沈線で三分割されているが、最上段の区画は同一原体を上下・左右に重ねて施している。⑰は口径約23cm、器高約12cmの土器である。口縁部と胴部にはRLの縄文を施す。

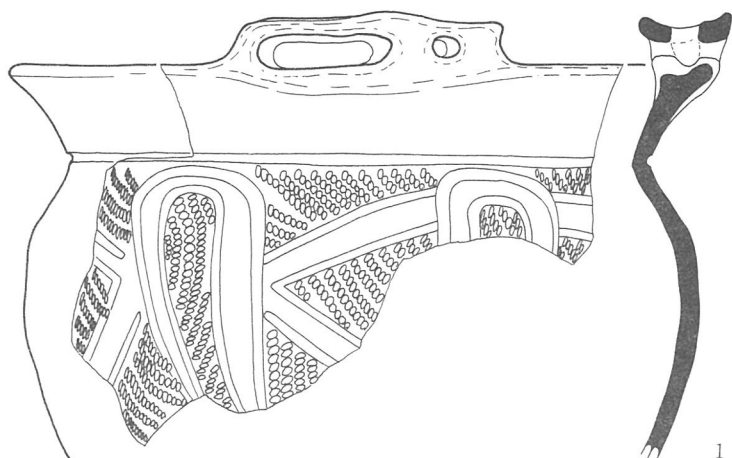
浅鉢(⑱～⑳) ⑱は口縁部と胴部の間が強く屈曲する土器で、内傾する口縁部には短沈線文、方形区画文が描かれる。胴部はLRの縄文が施される。内面の調整は丁寧ではなく、粗いナデ調整である。⑲は口縁部外側に粘土を貼付け拡張させる。口縁部上端面と口縁部直下は沈線をめぐらし、その間にRLの縄文を施す。内外面とも丁寧に研磨する。⑳は口縁部が大きく開く土器である。口縁部は内側に拡張させ、上端面には沈線をめぐらす。胴部外面には幅の狭い縄文帯を描き、そこには赤色顔料を塗布する。体部内面には段がつくられている。㉑も内外面を研磨する土器で、外面には幅の狭い縄文帯を描く。縄文帯には赤色顔料が塗布されている。内側には突帯状の段がつくられている。㉒は舟形を呈する土器である。内外面とも丁寧にナデ調整をおこなう。

注口土器㉓) 口径約9cmを測る。胴部はふくらむ。口縁部には突起を施している。胴部には多重化した沈線文を描き、縄文を充填する。

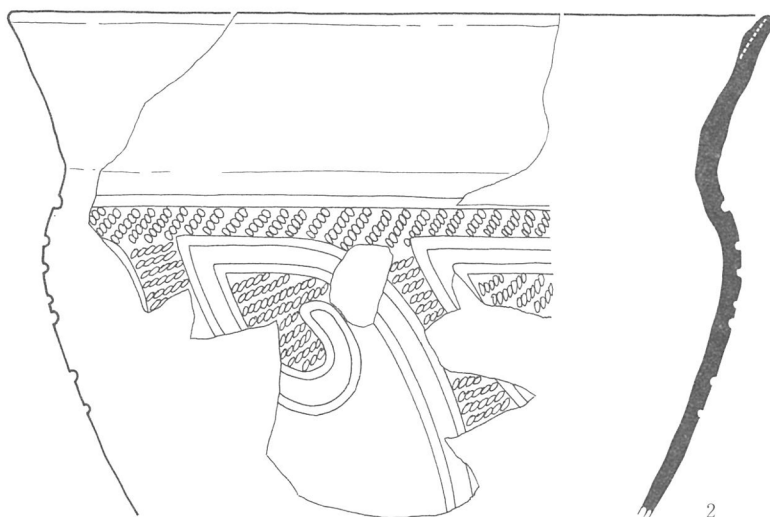
以上、図示したものは、ほんのわずかであるが、縄文時代後期前半の好資料を得られた。①～④は外反する頸部に球形の胴部をもち、頸部は無文帯とし、胴部には沈線と縄文による文様を展開させる。口縁部の肥厚は内側にするものや、肥厚しないものである。①～③は沈線で幅の狭い区画をつくり、そこを無文にし、外側に縄文を施すもので、無文の区画が①から③へと簡略化している。①の土器は口縁部の形態や橋状突起から判断して、北白川上層式の1期とされる土器群<sup>(1)</sup>の中でも古いタイプと考えられ、堺市四ツ池遺跡より出土した四ツ池型土器に近い。また、沈線による区画が接する所は無文帯がつながらず、それぞれ独立している。②は、無文の区画が渦状になっているが、③は渦ではなく逆「L」字状で、文様の退化と考えられる。①～③の縄文は①がRLで②③がLRである。沈線文のあと充填する手法である。④は胴部上端に文様の集約部があり、そこを中心として四条の弧状沈線文帯が対向して垂下する。このような文様は北白川上層式1期の土器群の中に見出されるものであるが、⑤⑥とも類似しており、東日本の土器の文様を消化したものと考えられる。⑤⑥は胴部文様が東日本の堀之内I式土器のそれに近似する。⑤は口縁部文様は近畿、瀬戸内地域に出土する縁帯文土器と同じ、渦文、連弧文であるが、頸部に描かれる刻み目突帯や胴部に展開する沈線文縄文は堀之内I式土器の文様に類似する。⑥の胴部文様も同じである。⑧～⑪は北白川上層式1期とされる土器群に普遍的な器形、文様を展開させるが、⑧と胴部に描かれる渦状の文様や、文様の集約部にある刺突文は、東日本の文様の影響を残す。⑫⑬も⑧～⑪と同じ時期の土器であろう。⑭は口縁部が内側に拡張し、上端面に沈線をめぐらしており、四ツ池型土器の口縁部に似る。浅鉢では⑰～⑱が幅の狭い縄文帯をもっており、瀬戸内地方の福田KII式土器に伴う浅鉢に近い。⑳<sup>(2)</sup>は東大阪市繩手遺跡より出土したものに、同じ形態のものがある。㉑の注口土器は胴部文様が多重の沈線文と充填縄文とで描かれており、④～⑥の深鉢と同時期と判断した。

この遺構から出土した土器は東日本の堀之内I式土器や、瀬戸内地方の福田KII式土器に類似するものや、四ツ池型土器に近い文様をもつもの、北白川上層式1期の内容をもつ土器など、様々な文様が見られる。これらが一つの遺構から出土したことで、各地との併行関係を知る手がかりとなろう。ただ近畿地方の土器と考える①～④ではその文様からやや時期差があると考えられ、他地域の土器がどのように対応するかは、これからの課題である。仏並遺跡においてはこれらの土器が一時期併存していた可能性は高い。

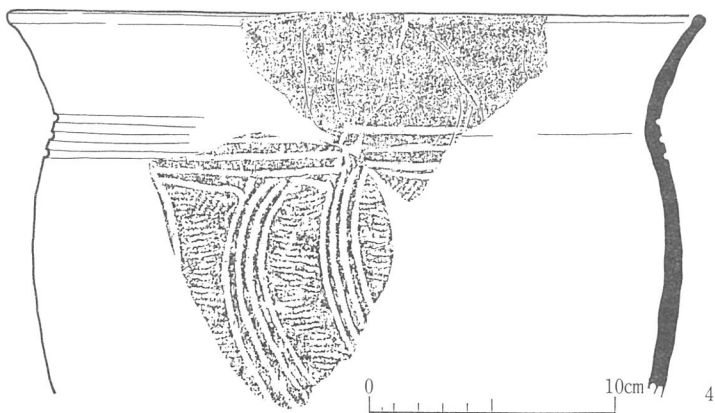
石器にはサヌカイト製の打製石器と円礫石器がある。打製石器のうち実測したものは石



1

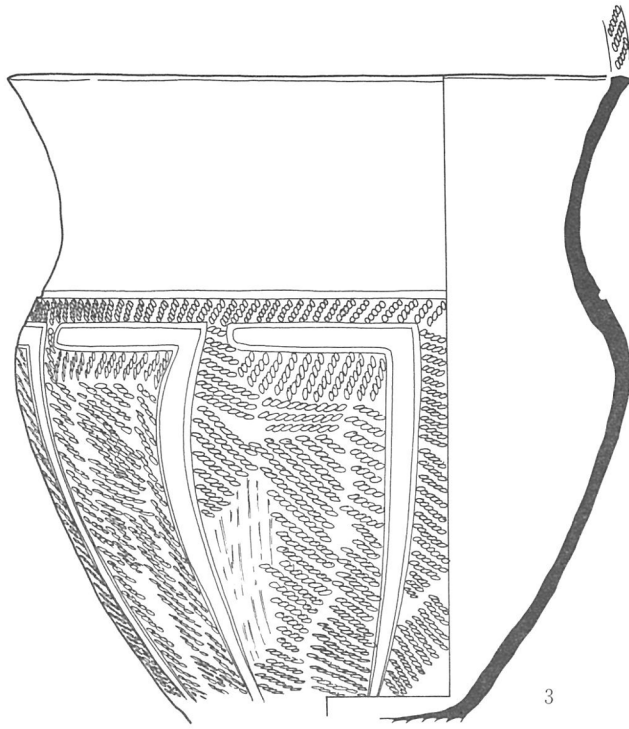


2

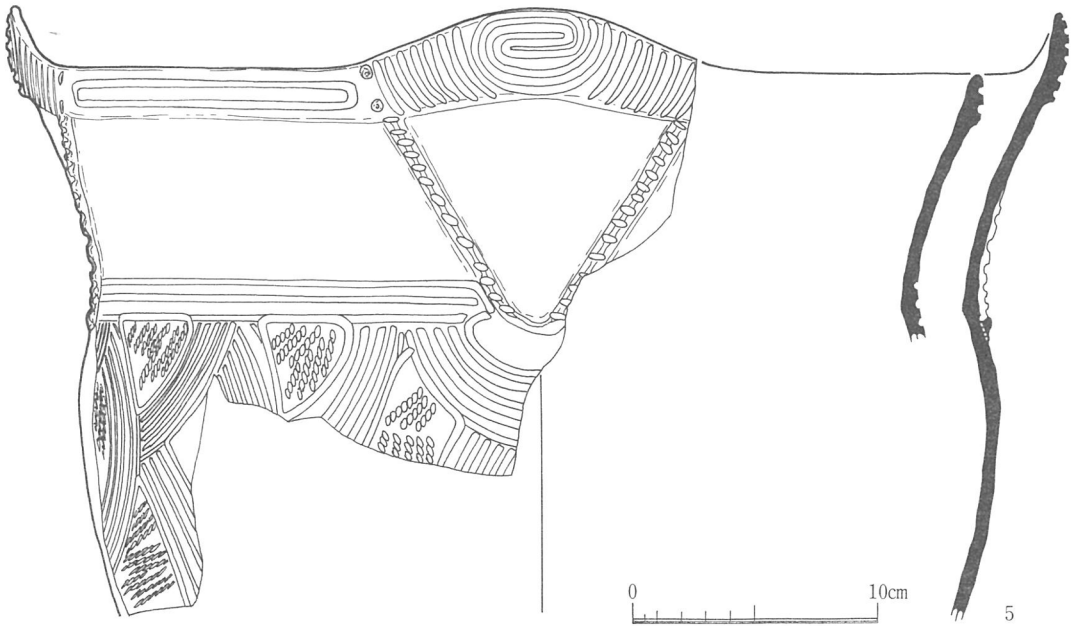


4

第9图 71-OD 出土土器(1)



3



0 10cm

5

第10图 71-0D 出土土器(2)

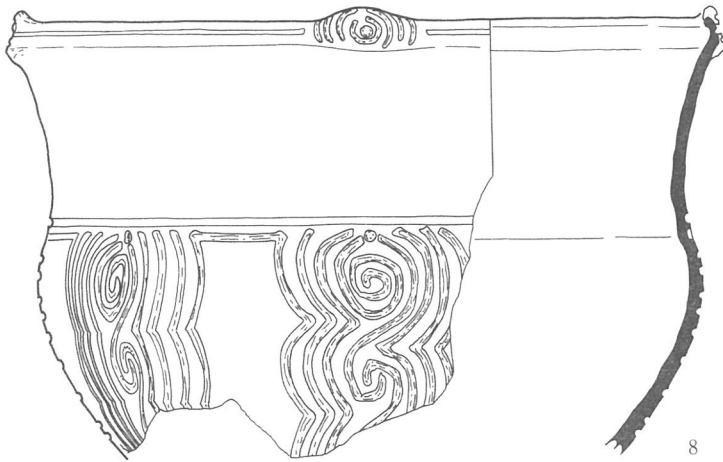




6



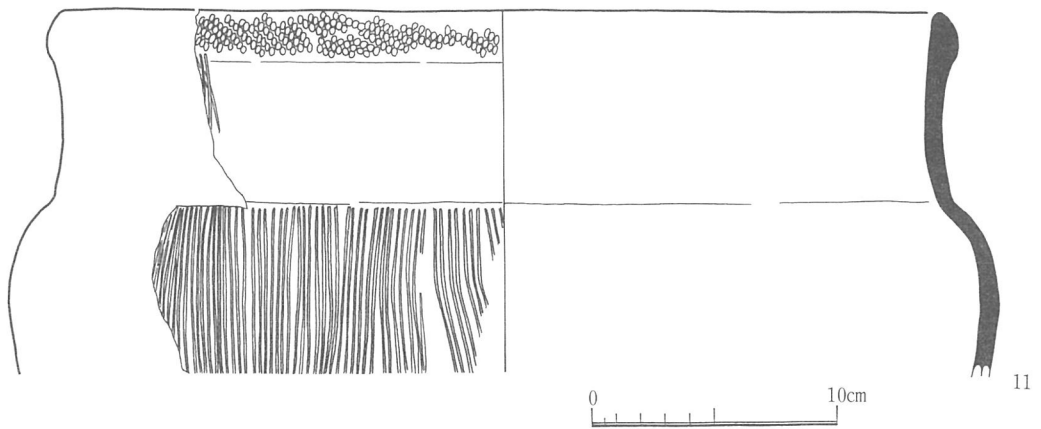
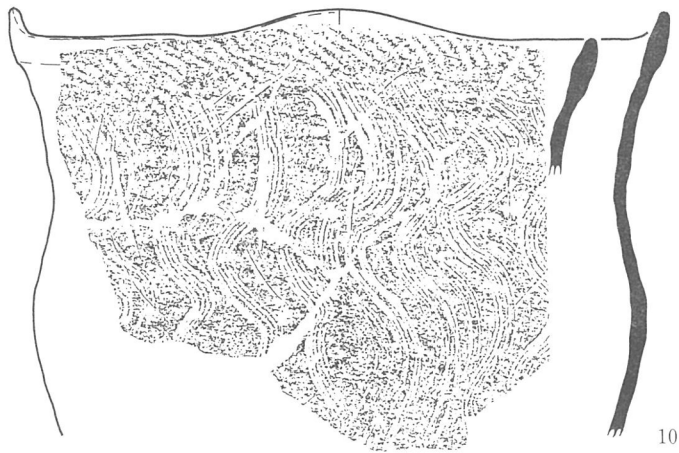
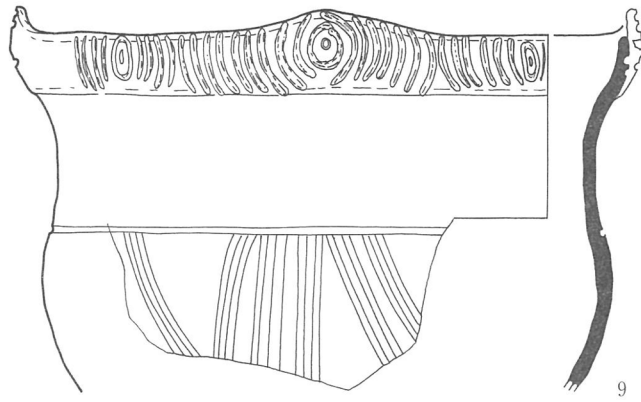
7



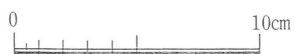
8



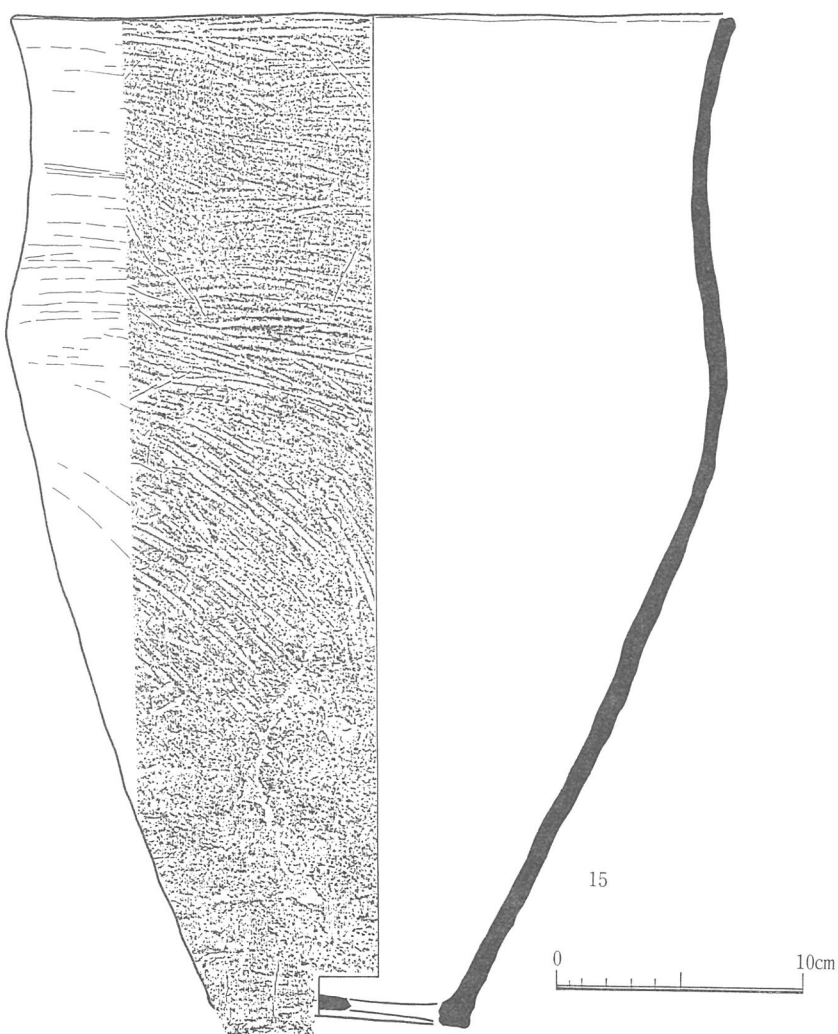
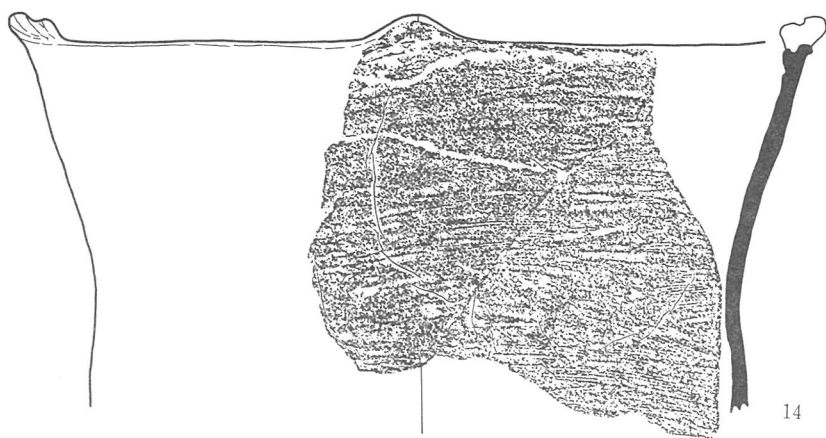
第11图 71-OD 出土土器(3)



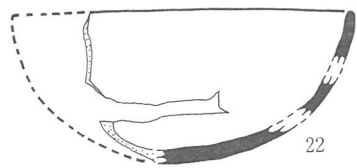
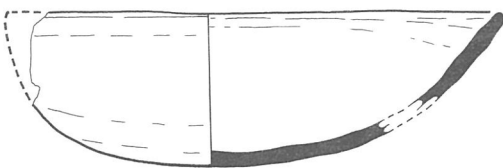
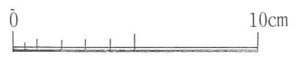
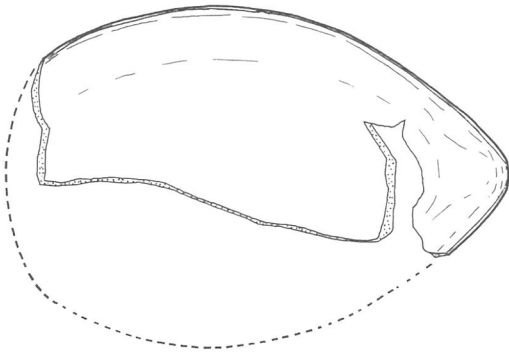
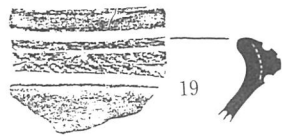
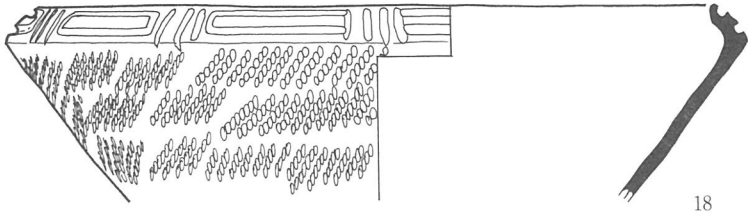
第12图 71-OD 出土土器(4)



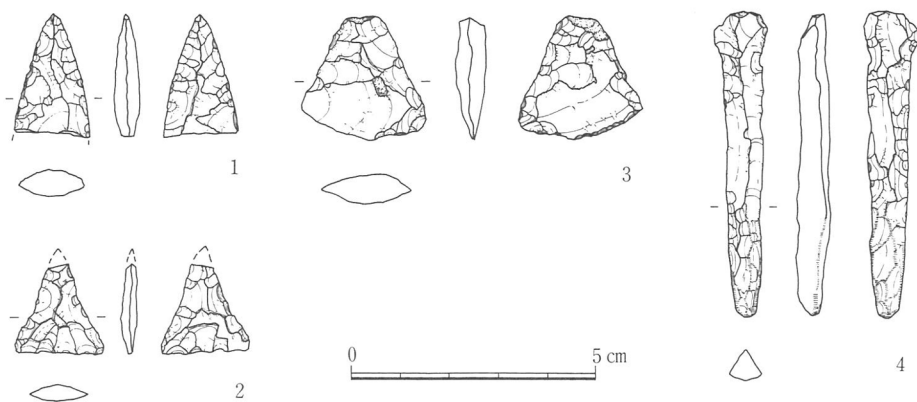
第13图 71-0D 出土土器(5)



第14图 71-OD 出土土器(6)



第15图 71—OD 出土土器(7)



第16図 71-OD 出土石器

鏃2、削器1、石錐1であるが、他に剥片が多量にありなかには細部調整がみられるものもあるがここでは割愛した（第16図、図版57）。

第16図-1は凹基無茎式石鏃であるが、基部両端を欠失して一見平基式状を呈する。現存長25.5mm、幅15.5mm、厚さ5.1mm、重さ1.7gである。割に整美なつくりの石鏃である。

2は平基無茎式石鏃で、側縁はややくびれる。先端を欠失しており、現存長18.8mm、幅18.1mm、厚さ3.2mm、重さ0.9gである。

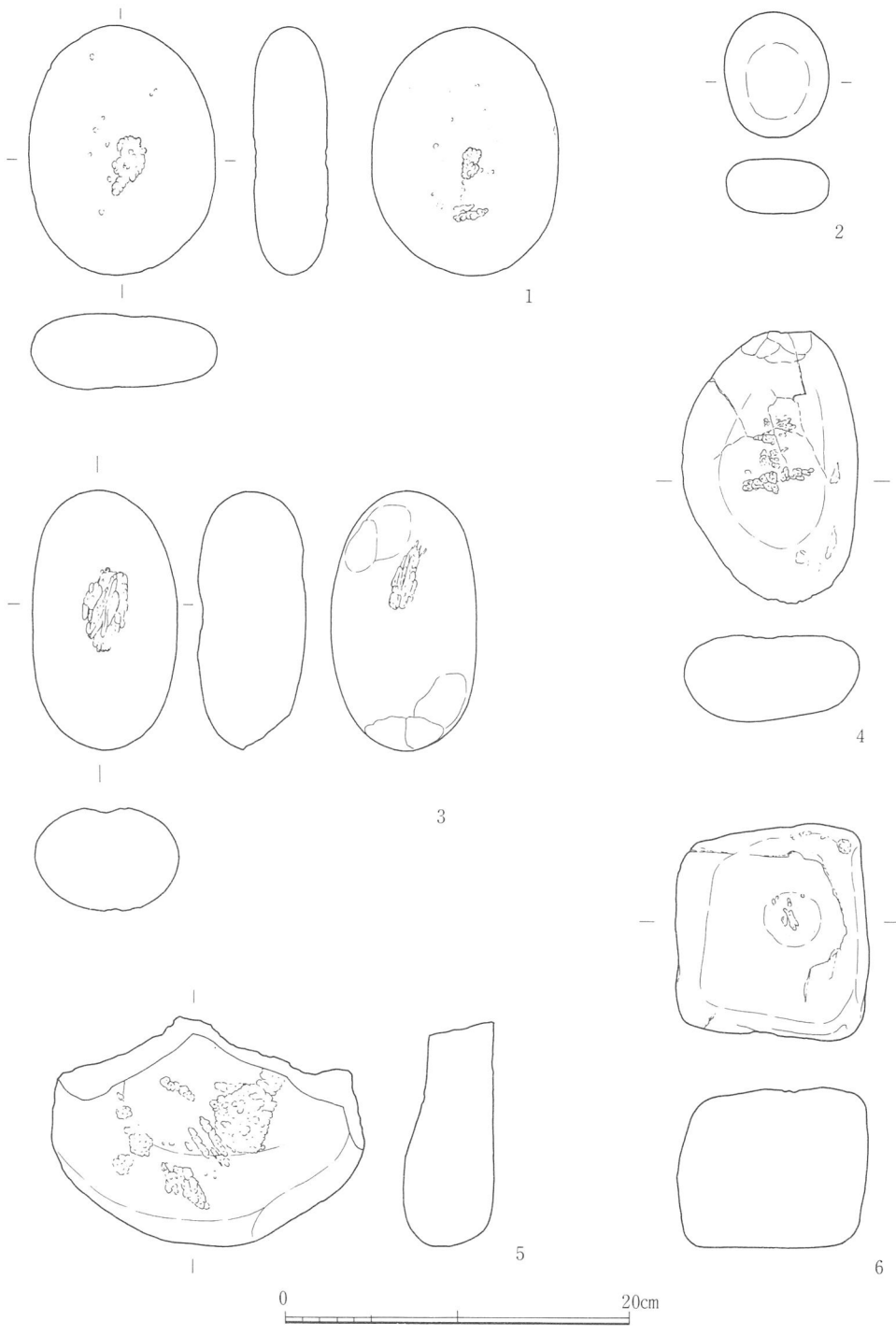
3は相対する2側縁に調整を施した小形の削器である。先端は自然面を残す。長さ15.3mm、幅25.5mm、厚さ6.3mm、重さ3.4gである。

4は石錘で、つまみ部はない。断面三角形で基部はややふくらみ先端には回転痕がある。長さ62.2mm、幅10.8mm、厚さ6.8mm、重さ4.2gである。

第17図は円礫石器で、すべて遺跡周辺で産出する砂岩を材料にしていると思われる。磨石、敲石、台石がある（図版58）。

2は磨石で、小形の楕円形円礫を使用し、両面に研磨痕がある。敲石は円形ないし楕円形の円礫を使用し、両面に敲打痕がある。3は長目の円礫を利用したもので、端部に剝離痕がある。4には敲打痕とともに研磨痕がある。5・6は石皿又は台石である。5は研磨によりかなりの凹面となるが敲打痕も残る。4は方形の石を使った台石で、上面中央に凹部がありそのなかに敲打痕を残す。

**72-OX** 71-ODの北にある落込みで、71-ODに切られている。当初竪穴住居跡の可能性を考えて発掘を進めたが、壁のたちあがりはあまりはっきりせず、確実に柱穴と思われるものもなく、住居跡である確証が得られなかった。



第17图 71-OD 出土円石器石番

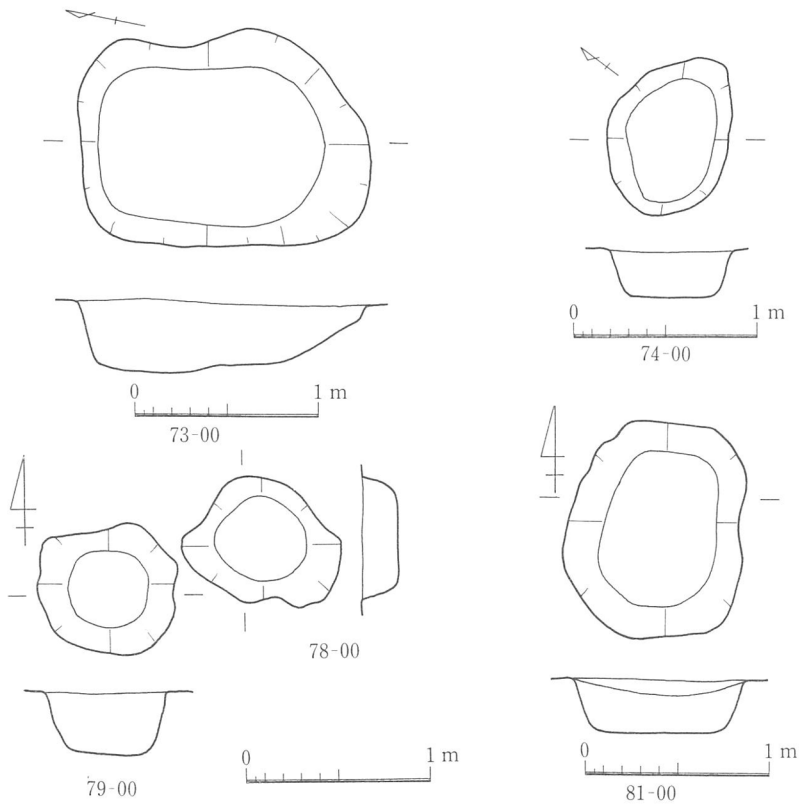
73-00 G-20LY 区にある。隅丸長方形を呈し、長さ1.6m、幅1.2m、深さ0.4mである。埋土は暗褐色土で細礫を多く含む。北半の上層には拳大の礫を多く含む。

粗製土器の胴部破片が5片出土している。粗いナデ調整を施す。縄文時代後期前半に属するものであろう。

74-00 G-20JX・KX 区にある。小形の、東隅部が張り出す楕円形土壙で、長さ0.85m、幅0.7m。深さ0.25mである。埋土は褐色土である。

深鉢2点が出土している。1点は橋状突起をもつ波状口縁の土器である。口縁部は内側に拡張し、上端に平坦面をつくる。もう1点は沈線間にRLの無節の縄文を施す。縄文時代後期前半の土器である。

78-00、79-00 G-20LX 区にある。住居址71-00の北西角に接する。径0.6~0.7mの不整円形で、深さは78-00が0.2m、79-00は0.35m、埋土は78-00は暗褐色砂礫



第18図 73・74・78・79・81-00



土、79-00 は暗褐色土である。

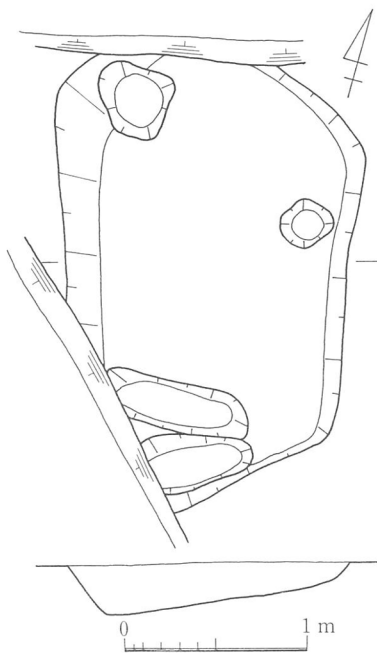
78-00 からは細片であるが、沈線と縄文を施す土器が1片出土している。縄文時代後期前半の土器である。

79-00 出土土器は深鉢があり、沈線間に LR の縄文を充填する文様をもつ土器片である。縄文時代後期前半に属する。

**81-00** G-20KV・LV 区にある。不整楕円形で長さ1.2m、幅0.95m、深さ0.3m である。埋土は上層が褐色砂礫土、下層が暗褐色土である。

土器は5片出土している。細片であるため図示しなかったが条線文を描く土器・精製土器がある。平底を呈する底部も出土している。いずれも縄文時代後期前半に属するものであろう。

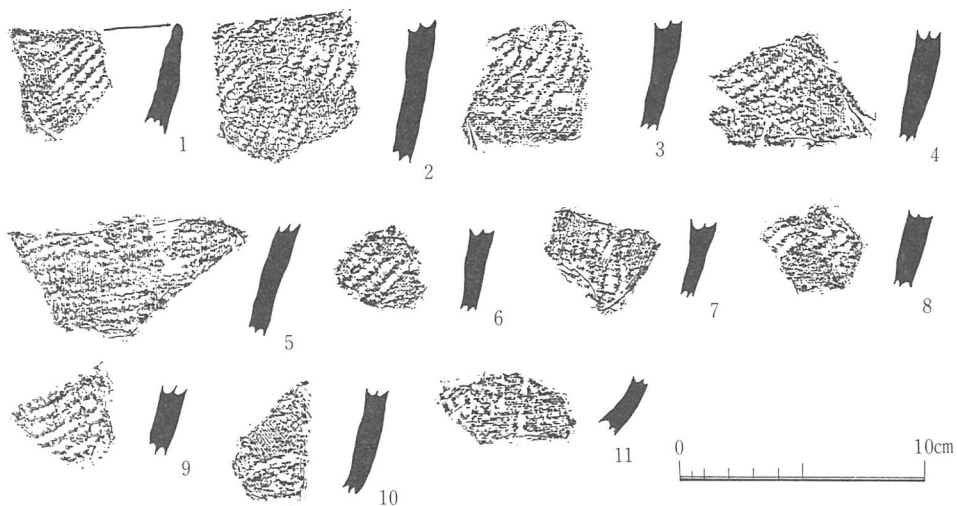
**82-00** G-20KU・LU 区にある。調査区北辺の側溝と第1トレンチにより土壌の北辺と西南隅を切られているが、全体の形状は大略復原できる。西辺が長く東辺が短い台形を呈し、長さは2.6m前後と推定され、幅は1.7m である。床面は東が浅く西が深く深さは0.3m 程度である。床面には4個のピットがあるがその配置に規測性はみられない。中央やや北寄りと南端部には人頭大の礫が多く含まれている。埋土は暗褐色土である(第19図、図版11)。



第19図 82-00

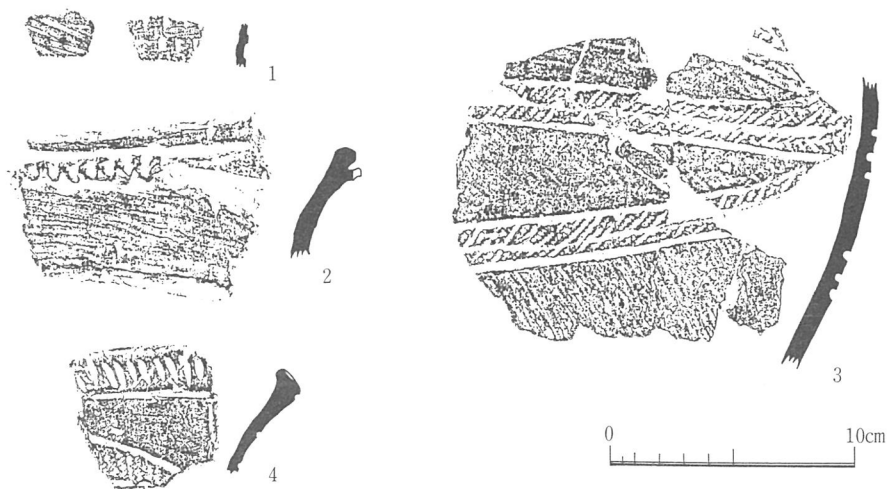
深鉢(第20図) ①は口縁部の破片で、上端には刻み目がある。いずれの土器も外面に LR の縄文を施す。胎土内に繊維を混入しており、繊維土器の一群であろう。色調は茶褐色を呈し、角閃石を含む。生駒西麓産の粘土を用いたものである。この土壌からはこれら一群の土器が図示したものをあわせて26片出土したが、その外に、1点だけ色調・胎土が異なるものが含まれている。色調は灰白色を呈し、長石クサリ礫チャートを含む。繊維は含まない。縄文時代後期に属する土器片と考える。この土器片が、82号遺構の時期を示すものか、それとも採集時点による混入であるかは不明である(図版37)。

**84-00** G-20MV 区にある。径1.4~1.5m の不整台形で、深さは0.8m である。埋土は暗褐色土で人頭大の礫を多く含む。



第20図 82-00 出土土器

深鉢（第21図） ①は器壁の薄い土器で、外面には横方向にヘラ状の原体で「D」字状の押し刺突文を描く。器壁が薄いため刺突部文の内側がふくらむ。内外面とも条痕調整で、胎土内に角閃石を含み、黒褐色を呈する。②は口縁部の破片で、口縁端部直下に刻み目をもつ突帯を貼付けて口縁部を拡張させる。口縁端部と突帯の間には深い沈線をいれる。頸部は外反し、下端に1条の沈線をめぐらす。あとで述べるように、③及び87号遺構



第21図 84-00 出土土器

出土の⑦・⑧の口縁部と考える。③は球形にふくらむ胴部の破片である。図は87号遺構出土の⑧と接合した形を示している。3条単位の沈線の上にLRの縄文を施した文様帯が一箇所に集約し、その部分では渦状(円弧)の文様が描かれる。色調・胎土・文様等から判断して、②と87号遺構の⑦と同一土器である。②が口頸部で87号遺構の⑦が胴上半部で、③が胴下半部にあたると考える。④は口縁端部を内側に拡張し、平坦面をつくる。頸部は外反する。口縁部上端面には斜めの刻み目を施し、頸部には磨消し縄文帯を描く(図版37)。

この遺構から出土した土器は①を除いて、ほぼ同一時期のものと考えられる。①は調整手法や文様から判断して、縄文時代早期末から前期初頭にかけての土器であろう。同様の文様をもつ土器として、滋賀県栗津遺跡<sup>(3)</sup>、福井県鳥浜貝塚<sup>(4)</sup>に類例がある。②～④は縄文時代後期前半の土器で、この遺構の時期を示す資料であろう。②～④は福田K II式土器と同様に口縁部を拡張させたり、胴部縄文帯も3条単位の沈線の上に縄文を施しているが、縄文帯が接する部分に絡みがない。福田K II式土器の特徴を色濃くもつ四ツ池型土器と考える。

**85—00** G—20MV・MW 区にある。84—00 に切られる。長さ1.5m、幅1.1mの不整形で、2個の土壌が複合しているとみられるが平面形検出時には明確でなかった。断面で観察すると西半部が新しいようである。埋土は暗褐色土で、西半部では礫を多く混入する。

土器は深鉢3点と粗製土器の胴部破片3点が出土した。中津式土器の新しいものから福田K II式土器もしくは四ツ池型土器にかけてのものである。

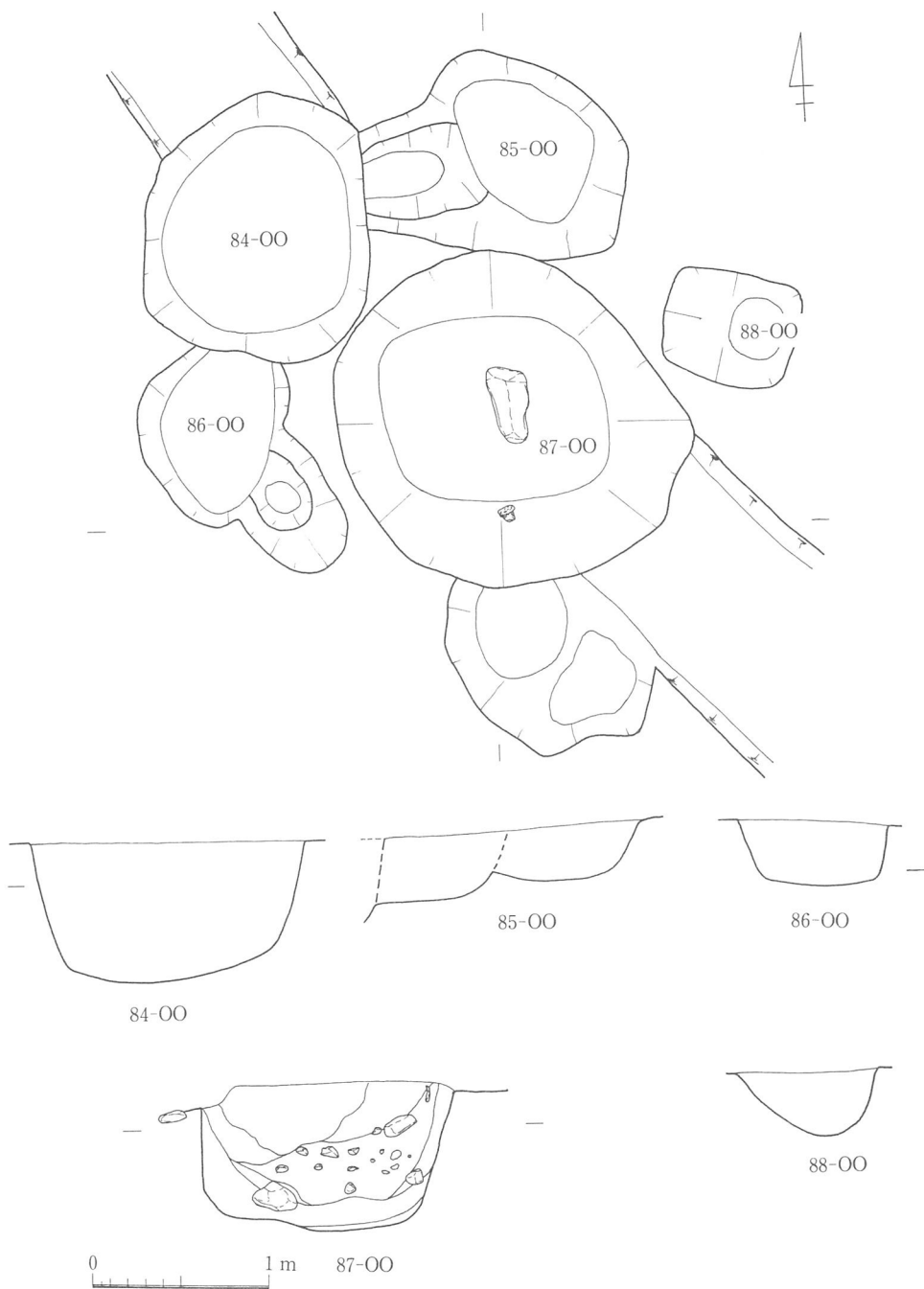
**86—00** G—20MV 区にある。84—00 に切られる。長さ1m、幅0.8mの楕円形で深さ0.4mである。埋土は暗褐色土である。

深鉢は頸部から胴部にかけての破片である。頸部と胴部の境に1条の沈線をめぐらしている。胴部にはRLの縄文を縦・横交互にころがし、羽状にする。頸部は無文である。他に4片出土しているが、いずれも粗製土器である。縄文時代後期前半の北白川上層式土器であろう。

**87—00** 調査区東端の第1トレンチ中央部分G20—MV、LV、MW、LW、にまたがって検出された縄文時代の土壌である。

検出面は第1トレンチ付近で検出された84—00、85—00、86—00、88—00と同様にT・P+123.00m前後の黄褐色砂礫層の地山面から検出されたものである。

平面プランは東西1.9m、南北2.0mを測る不整楕円形を呈する。深さは1.15mと本調査区から検出された縄文時代の土壌の中で最も掘削深度が深い。当初落し穴等の機能をもつ



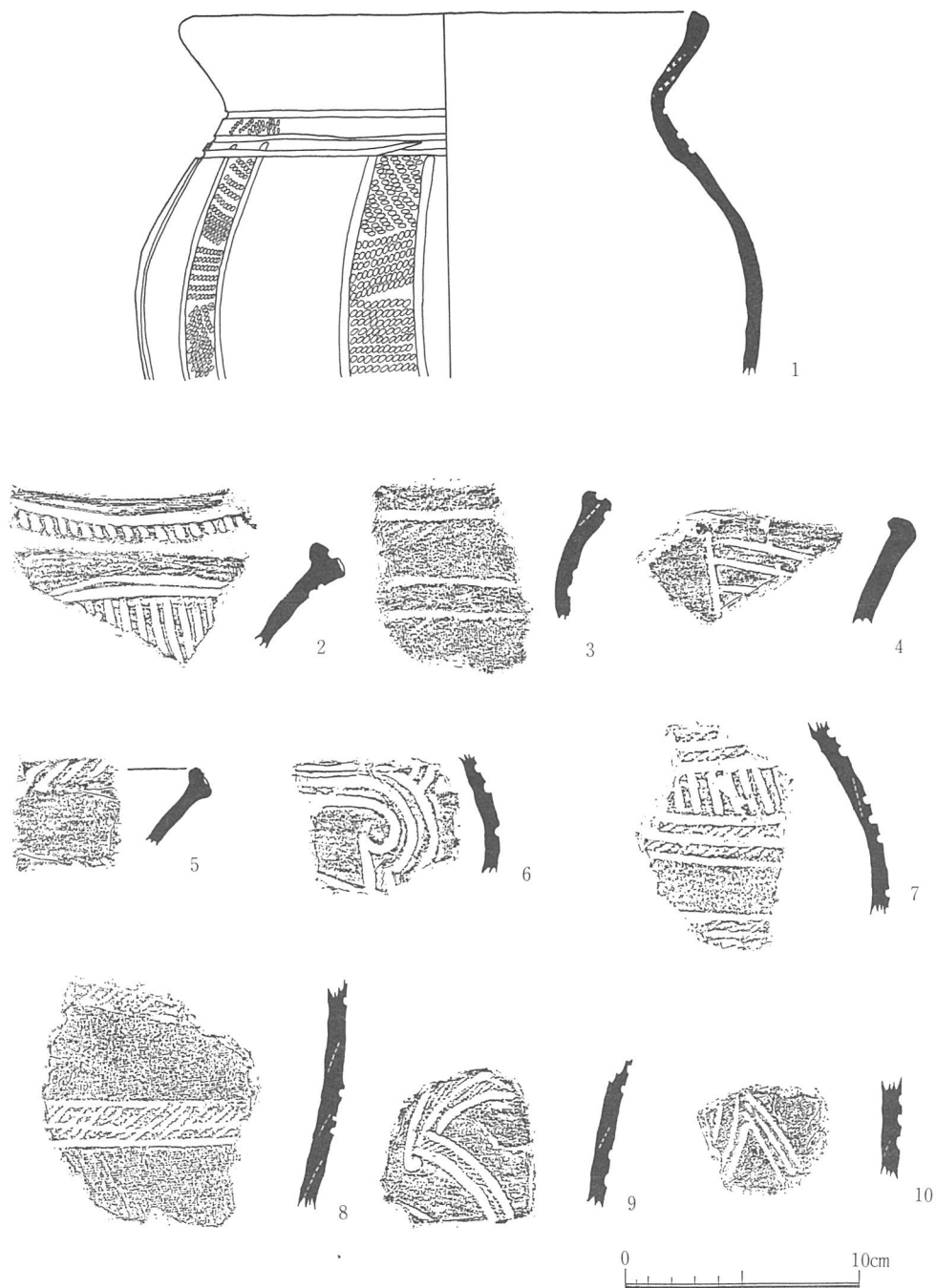
第22図 84~88-00

土壌と考えていたが、埋土の堆積状態は自然堆積をなし、人為的な施設等は認められなかった。因って本土壌の性格は不明である。しかしながら、深さ1.15mを測る土壌の最下部に50cm×20cm×36cmの石がすえられており、その石の下より口縁部に縁帯文をもつ深鉢形土器、条痕文深鉢形土器等が出土していることから、墓壇の可能性も充分考えられよう。

埋土の堆積は第Ⅴ層の礫を一切含まない黒褐色土が厚く堆積し、その上層第Ⅳ層に地山と思われる黄褐色砂礫層がなだれ込む形で堆積をみせる。このことより本土壌は大きく二時期に別れて堆積したと思われる。上、下層の出土土器からみても、本土壌は縄文時代後期を下るものとは思われない。第Ⅲ層は暗褐色土層が東から厚く堆積する。この第Ⅲ層は第1トレンチ内の付近の土壌の埋土と大変似かよっており、78—00の東壁がくずれる際堆積した土と思われる。多量の土器と共に、小礫、砂等多量に含まれる層である。又、この第Ⅲ層出土土器は、遺構付近の基本層序第6層とした縄文時代の面の土器と接合する。第Ⅰ層、第Ⅱ層には遺物の出土はみられない。

土器には深鉢と浅鉢がある（第23・24図、図版38・39）。

深鉢（①～⑰） ①～⑬は有文精製深鉢である。この中で①～⑩は口縁部が大きく開き、頸部で屈曲し、胴部は球形に膨らむ器形をもつもので、口縁端部は内側に拡張され、上端面が平坦になる。そこに文様を描くものもある。①は上半部の文様がわかる土器であるが、頸部以上は無文で、口縁端部にも文様はない。胴部には頸部との境に3条の沈線を描き、体部に縦方向の沈線を入れ、交互にLRの縄文帯と無文帯を並べる。無文帯は縦方向のミガキ調整である。口頸部内外面・体部内面は横方向のミガキ調整をおこなう。②は口縁部を内側に拡張させ、上端面を平坦にし、そこに1条の沈線をめぐらせ、その外側に刻み目をいれる。頸部には、口縁直下に2条の沈線を横にめぐらせ、その下に縦方向の沈線を頸部全面に描く。③も②同様に口縁端部を拡張させ、そこに1条の沈線をめぐらす。頸部には口縁部直下に1条と頸部下端に2条の沈線がめぐる。④は口縁端部を拡張するが、文様は描かず、頸部に縦方向の1条の沈線を描き、その沈線より斜め方向に沈線を描いている。⑤は拡張した口縁部に斜めの刻みをつける。⑥～⑩は胴部破片で、2～3条の沈線で文様帯を描き、そこに縄文を施すものである。⑥は沈線で文様を構成するもので、胴部上端にめぐらされた3条の沈線が胴部に垂下し、半回転した所で鉤形に入組む。⑦、⑧は同一個体の破片と考えられる。横方向に3条の沈線を描き、その上に縄文を施す。胴上部にはその幅の狭い縄文帯の間に縦方向の刻みを入れて無文部を充填する。⑨は幅の狭い縄文帯が鉤形に入組む部分である。上方からの縄文帯は3条の沈線が描かれているが、鉤形に入組ん



第23图 87—00 出土土器(1)



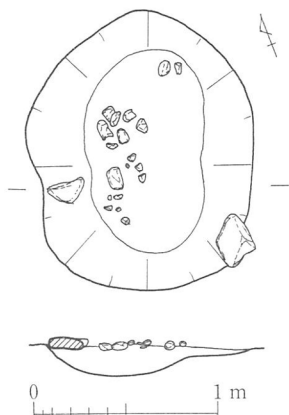
第24图 87-00 出土土器(2)

だ所からは沈線が2条になる。⑩は縄文を施さない沈線だけの文様帯であるが、⑨のように鉤形に入組むことはない。⑪は凹み底を呈する底部で、胴部下端まで3条の沈線文の上に縄文を施す文様帯が描かれている。胴部に描かれた文様帯が4箇所に集約している。⑫は波状口縁を呈する深鉢で、口縁部は丸く肥厚する。口縁部上端から器面に沈線が描かれ、縄文を施す。⑬は外に開く口縁部で口縁部は肥厚せず、上端面に刺突文を連続させる。口縁部直下には2条の沈線をめぐらす。⑭～⑯は粗製土器の口縁部破片である。⑭は口頸部が短く外反し、胴部は下方でふくらむ。外面は巻貝による条痕調整である。口縁部は肥厚せず、上端を平坦にする。⑮は口縁部がやや肥厚する。外面には縦横に条線文が描かれる。⑯は不規則に条線文が描かれる。⑰は外面を丁寧にナデ調整しており、有文精製深鉢の底部と考えられる。凹み底を呈する。

浅鉢 (⑱～⑳) ⑱は口縁部が内傾するもので端部は丸い。口縁部直下に2条の沈線を描き、その間に縄文を施す。⑲は3条単位の沈線の上に縄文を施した文様帯が交差した部分である。交差部分では沈線は途切れ、縄文も施さない。⑳は曲面が認められず、かなり大きな器形の一部と考える。かなり傾くため、皿状を呈するものと判断される。外面には2条の沈線を描き、その間に縄文を施す。

深鉢 (㉑・㉒) この2点の土器は暗赤褐色を呈し、胎土内に繊維を含む土器片である。㉑はLRの縄文を交互にころがし、羽状にみせている。㉒は上方に横方向の沈線を描き、その下位にLRの縄文を施し、押し引き沈線を加える。この2点はこの遺構の時期を示すものではなく、埋土内に混入していたものとする。縄文時代早期末～前期初頭に位置づけられよう。他の土器片は縄文時代後期初頭中津式土器～福田K II式土器に属するものである。中津式土器と考えるものは⑫・⑬で、他は器形・口縁部の形態・文様等の特徴から福田K II式土器もしくはそれに併行する四ツ池型土器であろう。その中で①は縄文帯が広く沈線間に縄文を充填するものであるが、器形・口縁部の形態・文様構成等に中津式土器とは大きな違いが認められるため、中津式土器より新しい土器と判断した。しかし、この胴部文様は福田K II式土器の中には見出せないものである。また、この遺構の遺物と隣接する84号遺構出土の土器が接合したが、接合した土器片である⑦⑧はここにトレンチを設定した際に出土した土器片である。84号遺構出土土器③として図示した⑧と接合した破片は、84号遺構を掘下げている際に出土したものである。このような事情から、⑦⑧は本来84号遺構に含まれていた遺物と考えた方が妥当かもしれない。



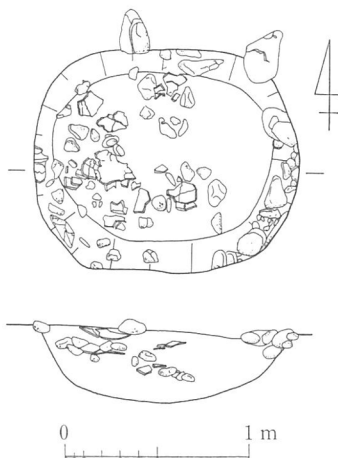


第25図 106-00

106-00 G-20 NV区にある。楕円形の浅い土壌で、長さ1.5m、幅1.2m、深さ0.2mである。暗褐色砂礫土が堆積し上面には礫が散乱している。礫間から少量の土器片が出土した。

粗製土器の細片が2片出土している。条痕調整のものとナデ調整を施すものである。縄文時代後期前半に比定できる。

120-00 G-20 OU区にある。長さ1.45m、幅1.1mの楕円形で深さ0.4mである。埋土は茶褐色土で、拳大の礫を含む。上半部にかかなりの土器片が含まれていた。大形の破片が多く、水平に近い状態で出土した(図版13)。

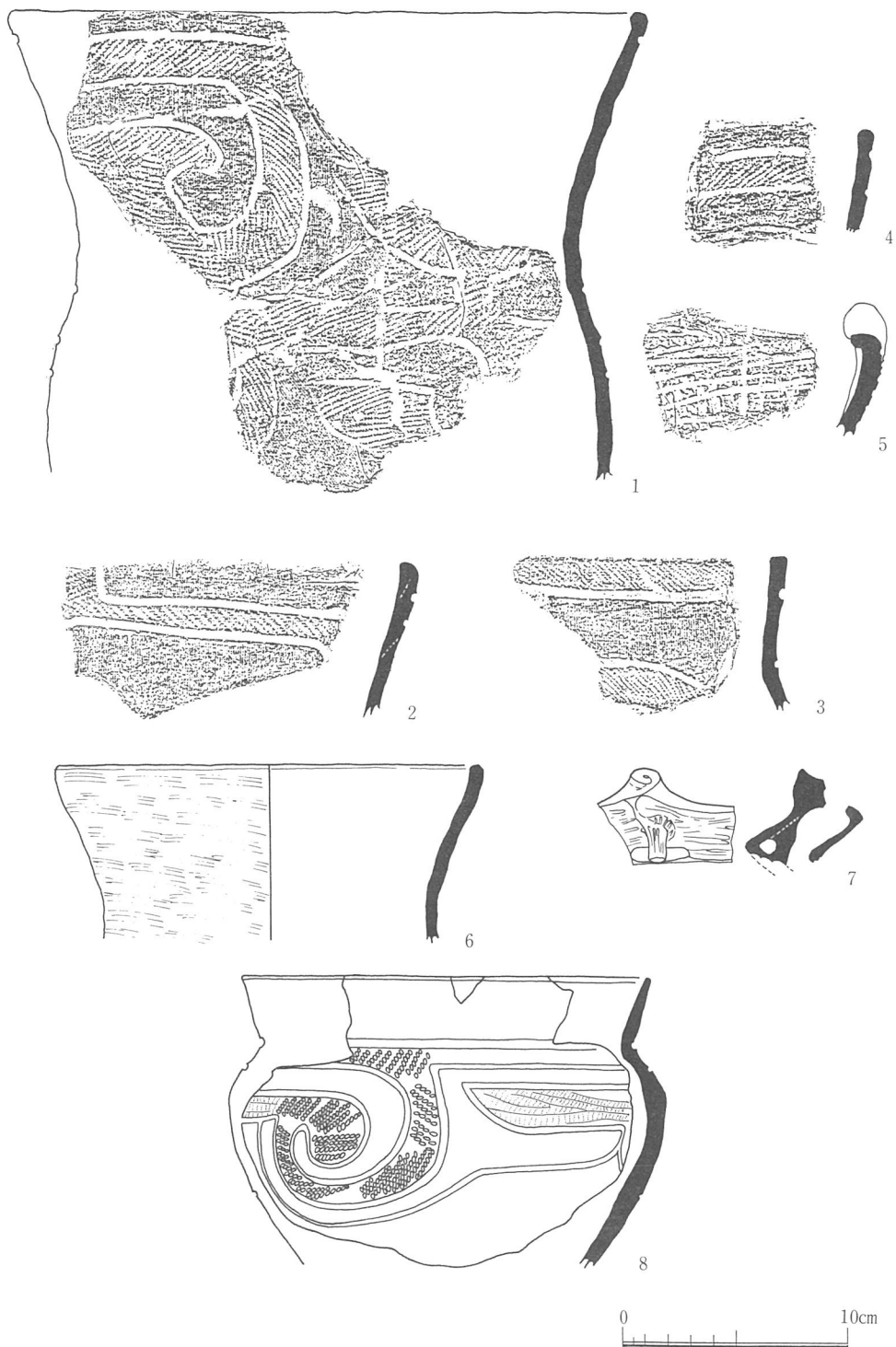


第26図 120-00

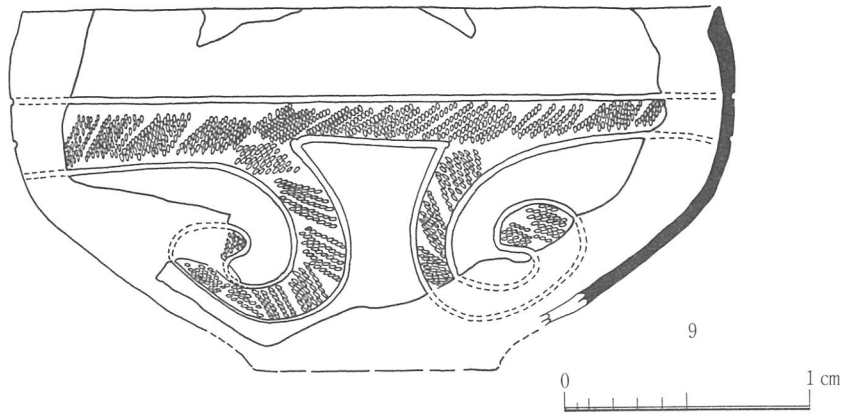
深鉢(第27図①~⑧) ①~④は有文の水平口縁の深鉢である。①は口径27cmを測り、口頸部は開き、口縁端部は丸く、やや肥厚する。外面の頸部と胴部には横に連続する「J」字状の磨消縄文を施す。縄文はLRの縄文である。②③は外に開く口頸部に幅の狭い磨消縄文帯を施す。②の縄文帯は口縁端部の一部を切って上端に達する。③は口縁端部が平坦で縄文帯は口縁端部直下に施す。縄文はいずれもRLの縄文である。④は①~③にくらべ薄い土器である。幅の狭い縄文帯が横方向にのびる。縄文はLRの縄文である。⑤は波状口縁を呈する土器で、波頂部は丸く肥厚する。外面

には格子状の多条沈線文が描かれている。⑥は無文の粗製土器である。外面は横方向の条痕調整である。⑦は頸部で「く」字状に屈曲する土器で、波状口縁を呈する。口縁部も内側に屈曲し、波頂部は粘土紐を渦状に貼付ける。波頂部下の頸部には粘土紐で橋状の突起をつくる。⑧も頸部で屈曲する土器で、外反する口縁部には文様はなく、球形の胴部に磨消縄文を施す。渦状の文様部はLRの縄文であるが、渦部より横にのびる文様帯は巻貝による擬縄文である。

浅鉢(第28図⑨) 口径28cmを測る土器で、口縁部は内側に平坦面をもち、端部が尖る。胴部には横に「J」字状、逆「J」字状の磨消縄文を連続させる(図版40)。

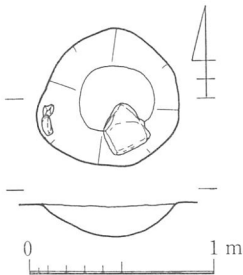


第27图 120—00 出土土器(I)



第28図 120-00 出土土器(2)

この遺構より出土した土器は縄文時代後期初頭の中津式土器の範疇に含まれるものであるが、器形や文様帯を観察すると中津式土器の中でもやや新しい段階に属すると考える。口縁部もあまり肥厚せず、⑧のように口縁部と胴部とを屈曲させることではっきりと区切った器形も出現している。また⑨の浅鉢も口縁端部の形態が、いわゆる中津式土器の中にはみられない独特のものである。⑦の土器は中津式土器の中には含まれないものであろう。口縁波頂部の粘土の渦文や、内側に屈曲する口縁部、頸部に付けられた橋状突起等は明らかに中津式土器より後出のものであろう。



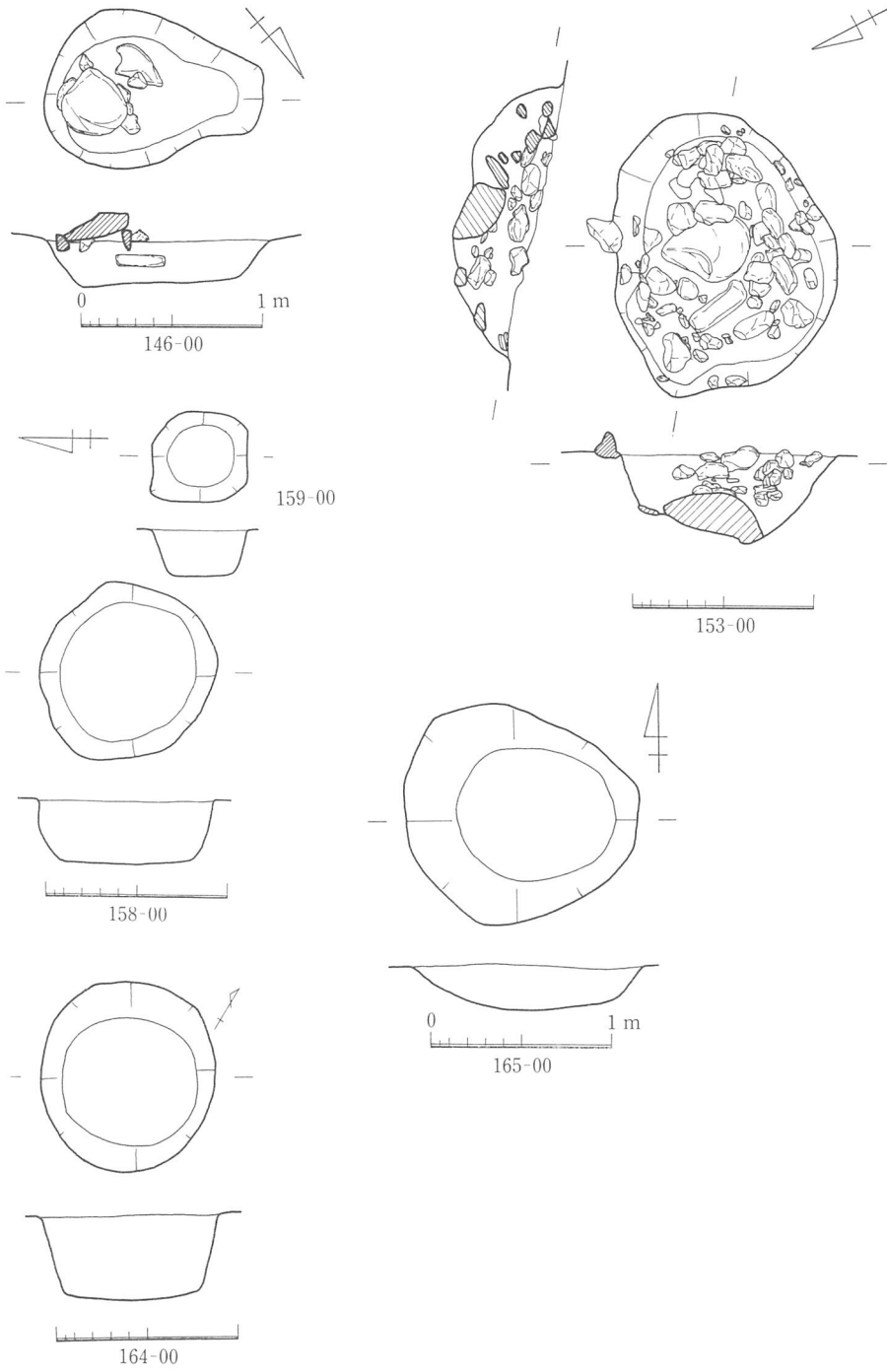
第29図 125-00

**125-00** G-20 NT 区にある。小形の円形土壇で、径0.7 m である。深さ0.2m 弱で断面形は浅い皿状を呈す。埋土は褐色土で、上面に一辺20cm 程度の石がのっている。

同一個体と思われる細片が4片出土している。器壁は薄く、文様はない。内外面ともナデ調整である。84-00 出土の①に胆土・色調が似る。

**146-00** G-20 MT 区にある。本来は径0.9m 程度の円形を呈すると思われるが、北西方向が拡張している。切合いの結果とも考えられるが、埋土の区別は困難であった。円形の部分の埋土上面に礫をならべ、その上に大きな石を置いており、その石の直下から土器片が出土した。埋土は暗褐色砂礫土であった。

小破片が8片出土している。一片は条線文が描かれている。他は巻貝条痕調整の土器である。縄文時代後期前半の北白川上層式土器に属するものであろう。



第30图 146・153・158・159・164・165—00

153—00 G-20 PR・PS 区にある。長さ1.6m、幅1.2mの楕円形を呈し、深さ0.4mである。墳内に拳大～人頭大の円礫があり、一見コ字状にならべたようにみえる。棺状の施設であった可能性が考えられるが明確でない(図版12)。

細片が1片出土している。外面にはLRの縄文が施される。内面はミガキ調整である。縄文時代後期前半に属するものであろう。

158—00 G-20 OS 区にある。ほぼ円形で径0.9～1mで深さ0.35mである。埋土は暗褐色土である。

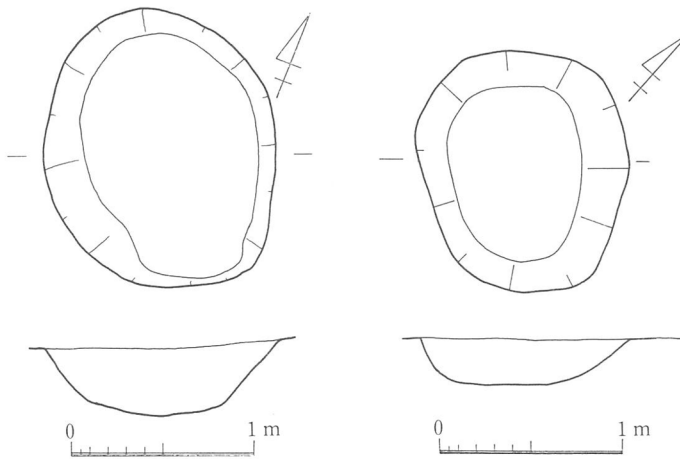
浅鉢(第32図①)は太い沈線を横方向に描き、その中に縄文を施す。口縁部直下の縄文帯の幅は狭い。口縁端部は肥厚しないが平坦である。他に粗製土器片が1片出土しているが細片で表面の剝落が著しい。縄文時代後期前半に比定できよう。

160—00 G-20 NR 区にある。台形に近い不整楕円形を呈す。長さ1.05m、幅0.9m、深さ0.3mで埋土は暗褐色土である。

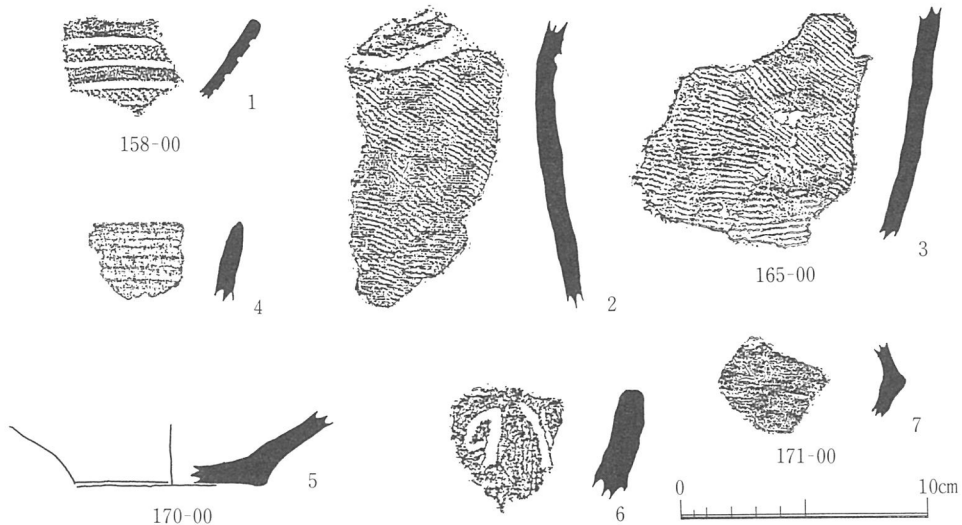
深鉢の口縁部の破片がある。外側に粘土を貼付け肥厚させ、RLの縄文を施す。北白川上層式土器であろう。

164—00 G-20 NQ 区にある。径0.9mほどの円形で深さ0.3mである。埋土は上層が暗褐色土、下層も暗褐色土だがやや細礫を含む。

2片出土しているが細片のため図示しなかった。一つにはRLの縄文が施されている。他はナデ調整の粗製土器である。縄文時代後期前半に属するものであろう。



第31図 170・171—OD



第32図 158・165・170・171-00 出土土器

**165-00** G-20 OQ区にある。164-00のすぐ南である。径1.2mほどの不整形円形というか「おむすび」形を呈し深さ0.25mである。断面皿状の浅いもので、埋土は暗褐色土である（第30図）。

深鉢（第32図②③） 同一個体の破片であるが接合しなかった。②は頸部から胴上半部にかけての破片で、頸部上方に太い沈線文が同心円状に描かれている。沈線間には縄文は施されず、頸部より胴部にかけてLRの無節縄文が施されている。③は胴下半部の破片で、全面にLRの無節縄文が施される。

器面全体に縄文を施し、口頸部に沈線文を描くことから縄文時代中期末に属すると考える。

**166-00** G-20 OQ区にある。やや小型の土壇で、径1m前後のほぼ円形を呈し深さは0.45mである。埋土は暗褐色土である。

粗製土器の小破片が2片出土している。ナデ調整を施しており、縄文時代後期前半に属するものであろう。

**168-00** G-20 OR・PR区にある。東西方向に長い楕円形で、長さ1.7m、幅1.05m、深さ0.3mである。埋土は黒褐色土で拳大の礫を含む。

4片出土したが、いずれも細片である。縄文時代後期前半に属するものであろう。

**170-00** G-20 PR区にある。楕円形を呈し、長さ1.55m、幅1.3m、深さ0.4mである。

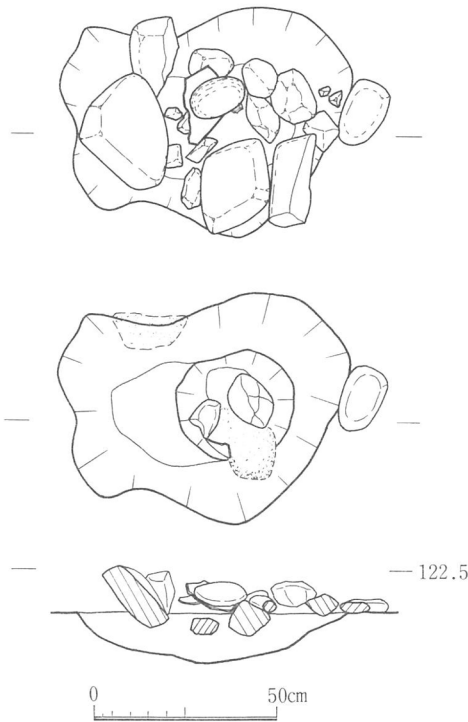
埋土は黒褐色土で、断面舟底状を呈する。

縄文時代後期前半に属すると考える粗製土器片が10数片出土している。巻貝条痕調整やナデ調整をおこなうものである（第32図④⑤）。

171—00 G—20 PR・PS・QR・QS 区にまたがって存在する。楕円形を呈し長さ1.3m、幅1.2m、深さ0.25mである。埋土は暗褐色土である（第31図）。

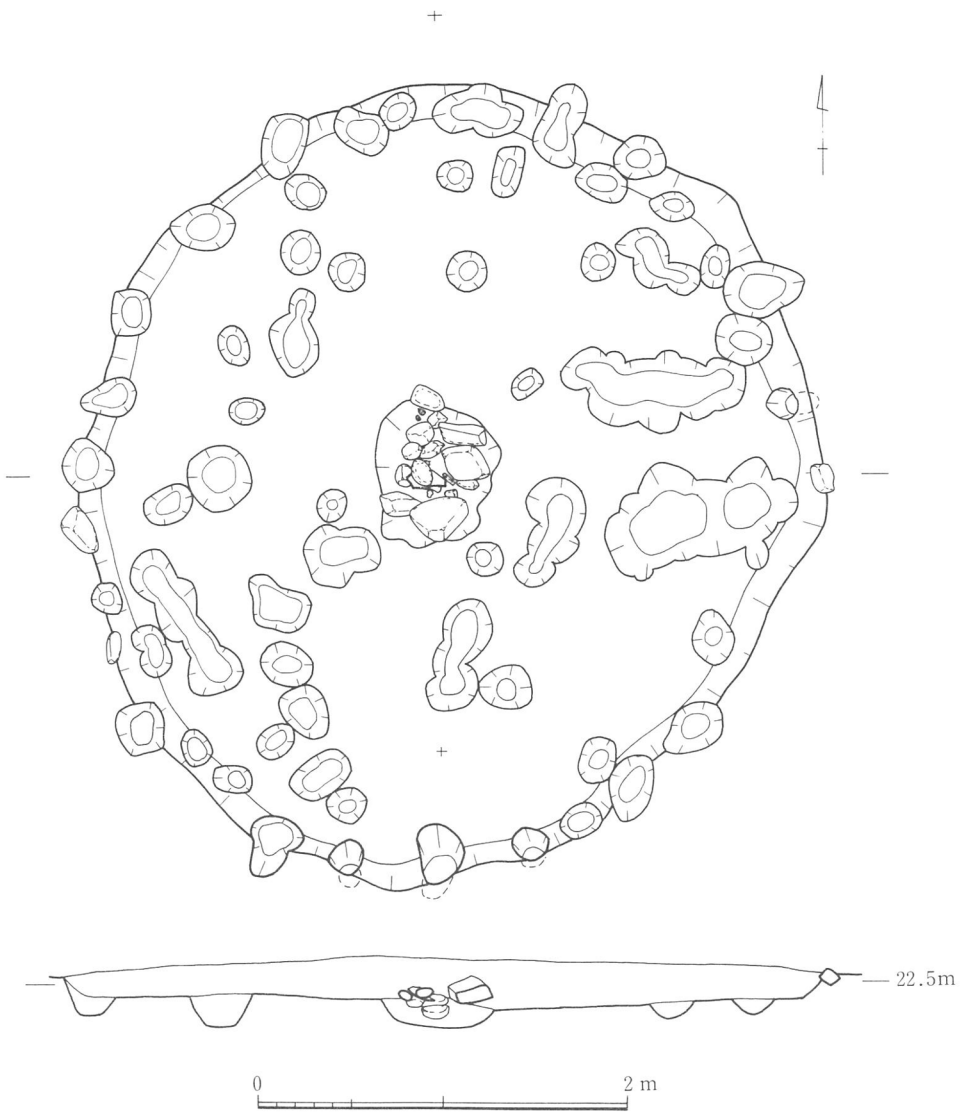
深鉢は3片出土している（第32図⑥⑦）。⑥は筒状を呈する破片で、上端にLRの縄文を施す。外面は太い沈線文を描き、その上からLRの縄文を施す。口縁部の突起であろう。⑦は頸部と胴部の境で「く」字状に強く屈曲する土器である。内外面ともナデ調整である。他に1片粗製土器の細片が出土している。⑥は口縁端部上面に縄文を施すため縄文時代中期に遡るものかもしれない。他の土器は縄文時代後期に属するものであろう。

### 3. 中央微高地及びその周辺



第33図 475—OH  
(374—OD 内 炉跡)

193—OD 中央微高地のG20—SH・SI・TH・TI 区にまたがって検出された。北東～南西方向に長い楕円形を呈する。長軸4.3m、短軸3.9m、残存深さは25cmである。埋土は暗赤褐色を呈する中粒砂混粘質シルトである。埋土内には拳大から人頭大の礫が多く含まれており、この遺構を放棄する際に混入したものと考えられる。礫は中央部に集中し、その中に若干の土器・石器が混る。埋土は分層することはできず、礫の混入状況等から判断して、人為的に一度に埋没したものと考えられる。床面は平坦で、床面のみならず、法面にも多くのピットが検出された。また中央には長軸80cm、短軸60cmの不整楕円形のピットが検出された。このピット内には拳大から人頭大の礫とともに炭・灰が検出された。底面は火を受けたとみえ、焼けており、このピットが炉として使われていたものと推定される。他のピット群は深さがまちまちで、床面からの深さは5cmから50



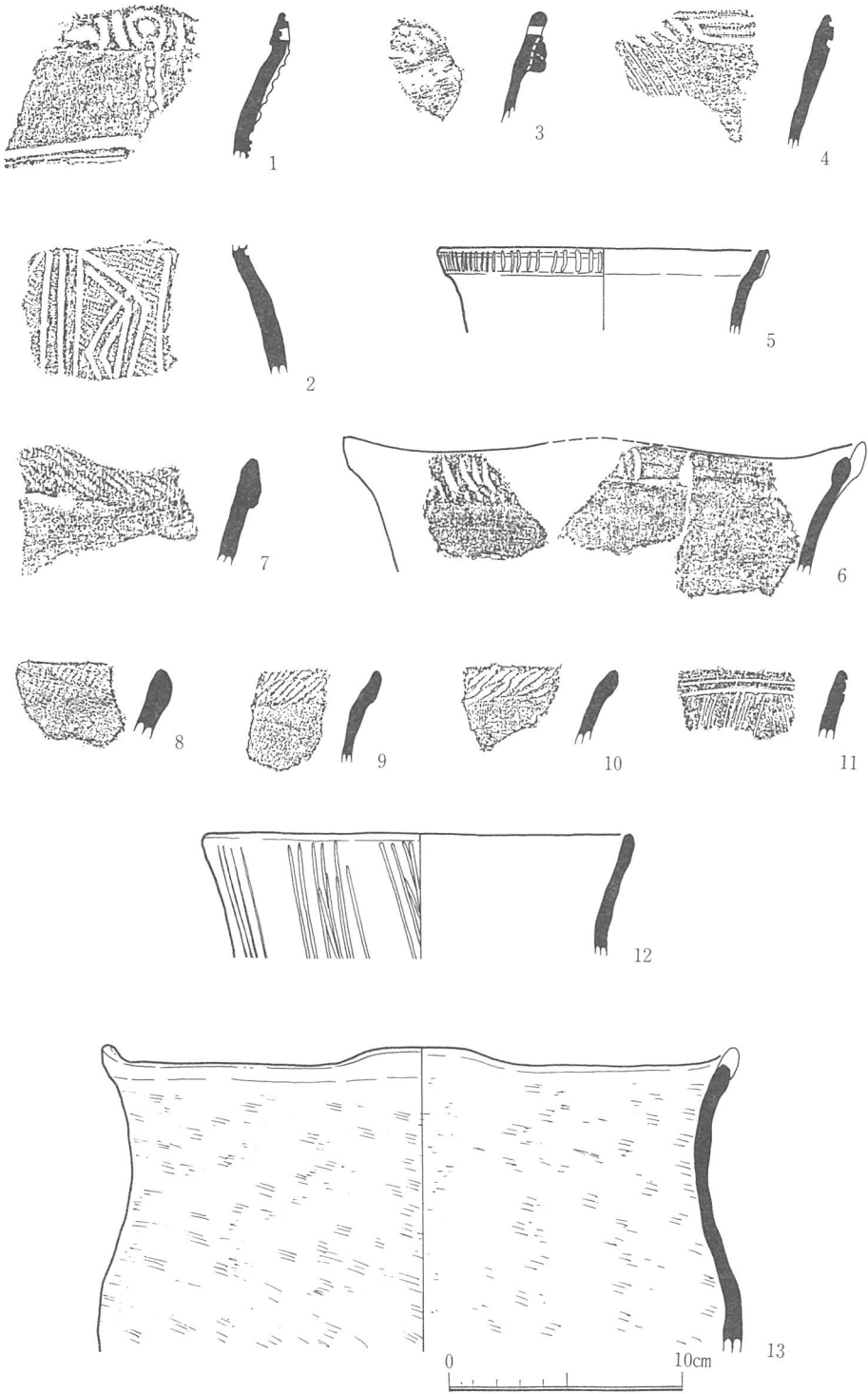
第34図 193—OD 実測図



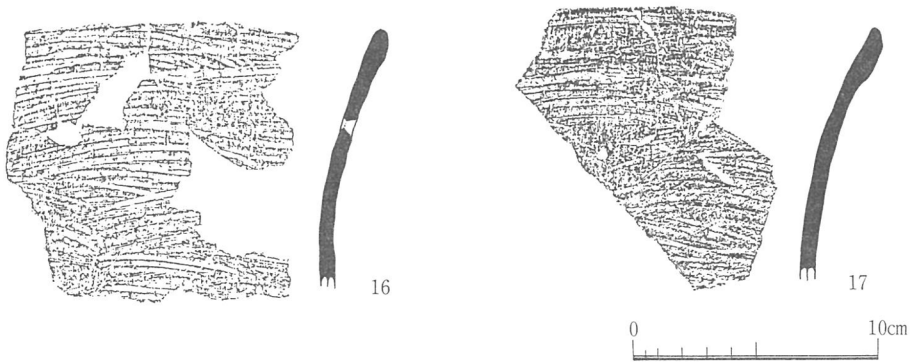
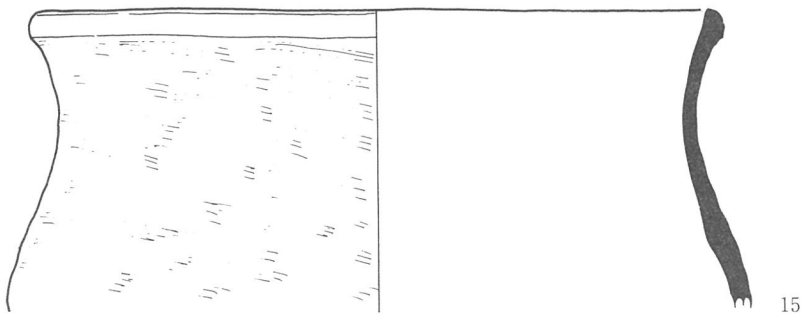
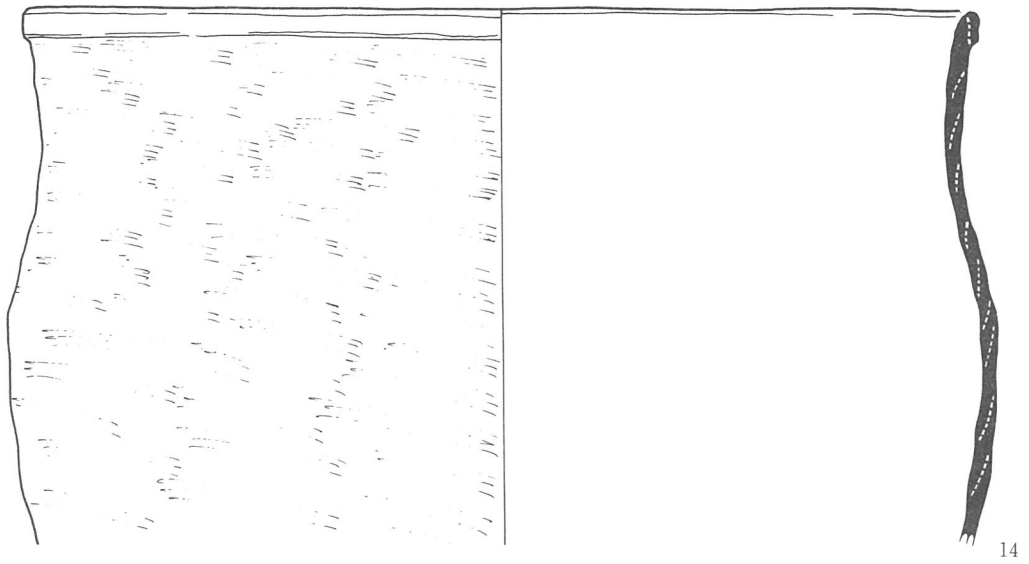
cmを測るが、8～20cm前後のものが多い。床面が黄色の砂礫層で、あまりしまっていない。貼床と考えられる層も認められなかった。出土土器は縄文時代後期の北白川上層式の2期に属する。緑色片岩製の石刀の断片が出土している(第34図、図版15～18)。

土器(第35～39図、図版42～44)

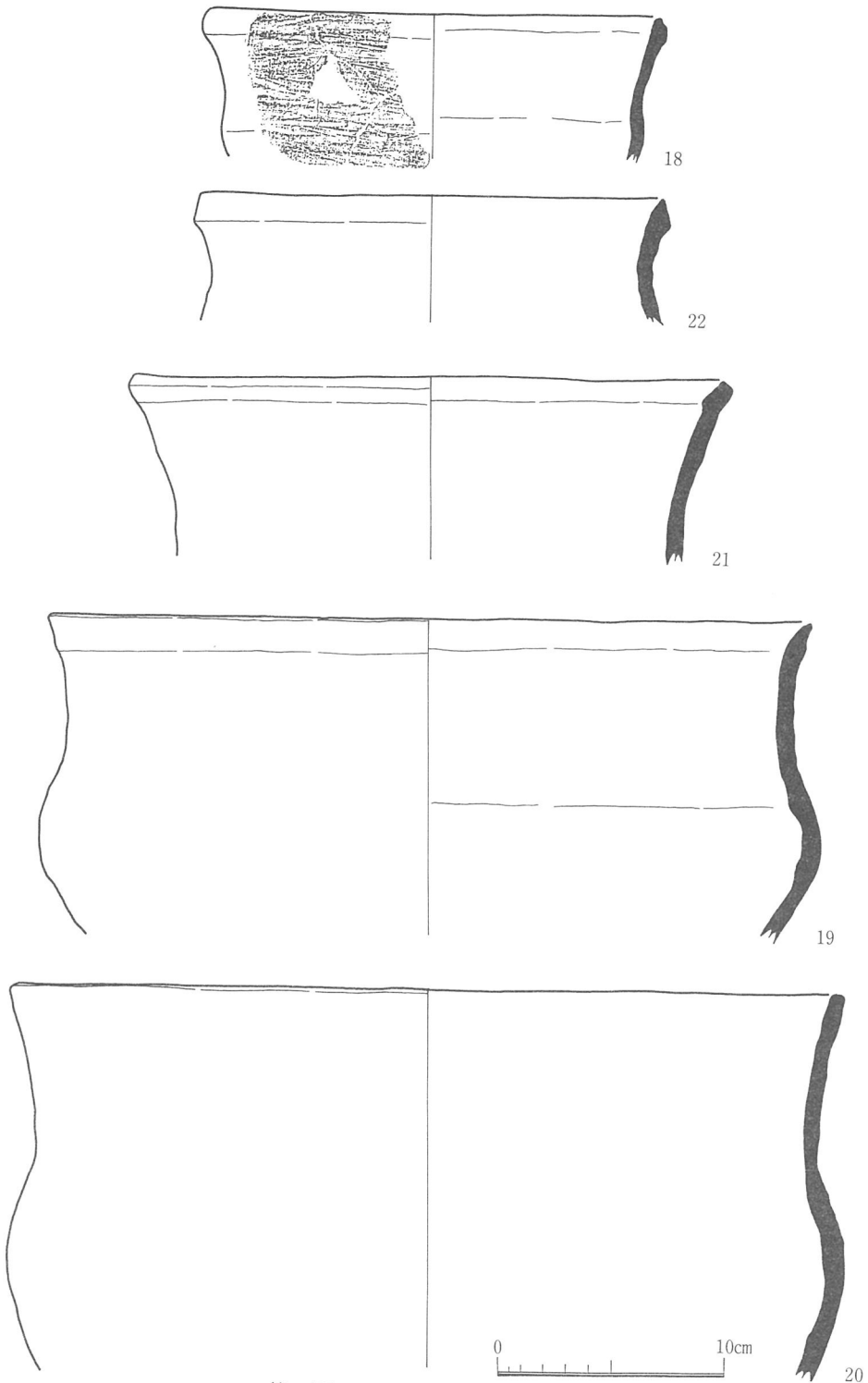
深鉢①～⑳ ①～㉔は口縁部が外反し、頸部と胴部の境で屈曲する器形のものである。①～⑤は波状口縁を呈し、口縁部は肥厚する。波頂部を中心に口縁部外面に沈線や縄文で文様を描く。①②は同一土器の口縁部と胴部の破片と考えられる。波頂部には竹管刺突文を中心に弧状の沈線文を描き、その左右には沈線をめぐらす。頸部は波頂部から突帯を垂下させ、刻み目を施す。頸部のくびれ部分には3本以上の沈線をめぐらす。口縁部内面に段がついている。胴部には3条単位の沈線が垂下し、その間にはLRの縄文を施し、その上から2条単位の沈線文をジグザグに描く。縄文はジグザグに描かれた沈線間を磨消している。③は波頂部の上方に円形の穿孔がある。その下部には粘土紐を巻いて貼付けている。④は波頂部を欠失するが、短沈線による文様がみられる。その左右には沈線による区画文が描かれ、その上から巻貝による擬似縄文が施される。頸部には波頂部下に垂下条線文が描かれている。⑤は口縁部下に段をもつ。口縁部には短沈線による文様が連続する。⑥は口縁部内面に沈線と縄文による文様をもつ。文様帯の下には段がつくられている。外面にも波頂部にのみ弧状の短沈線文が描かれる。⑦～⑩は肥厚した口縁部と胴部に斜行縄文を施すものである。⑦の口縁部は小波状を呈する。⑪⑫は水平口縁を呈すると考えられるもので、口縁部はあまり肥厚しない。口縁部文様帯はなく、頸部に垂下する沈線文や条線文を描く。⑪は口縁部直下に半載竹管による沈線文をめぐらし、頸部には条線文を描く。⑫は口縁部直下から底部にむけて集合沈線文を垂下させる。⑬～㉔は無文土器である。口縁部を肥厚させるものが多い。外面調整が巻貝条調整のもの(⑬～⑲)とナデ調整のもの(⑳～㉔)がある。㉔の口縁部は肥厚しない。㉕～㉗は水平口縁を呈し、口縁部から底部にむかって直線的にすぼまる器形のものである。㉕は口縁部を内側に拡張する。口縁部直下には刻み目を施す突帯を貼付け、胴部には沈線で三角形の文様を描き、三角形の外側に縄文を充填する。㉖も同様の文様を構成する。突帯は剥離している。㉗は同様の器形を呈する無文土器である。内外面とも丁寧にナデ調整をおこなう。㉘は口縁部が胴部からつづいて内弯するもので、他に類例のない器形である。口縁部にはLRの縄文を施し、そのあと押引きの刺突文を連続させる。胴部文様は渦巻状の縄文帯と入組み状の三角形の縄文帯を連続させる。



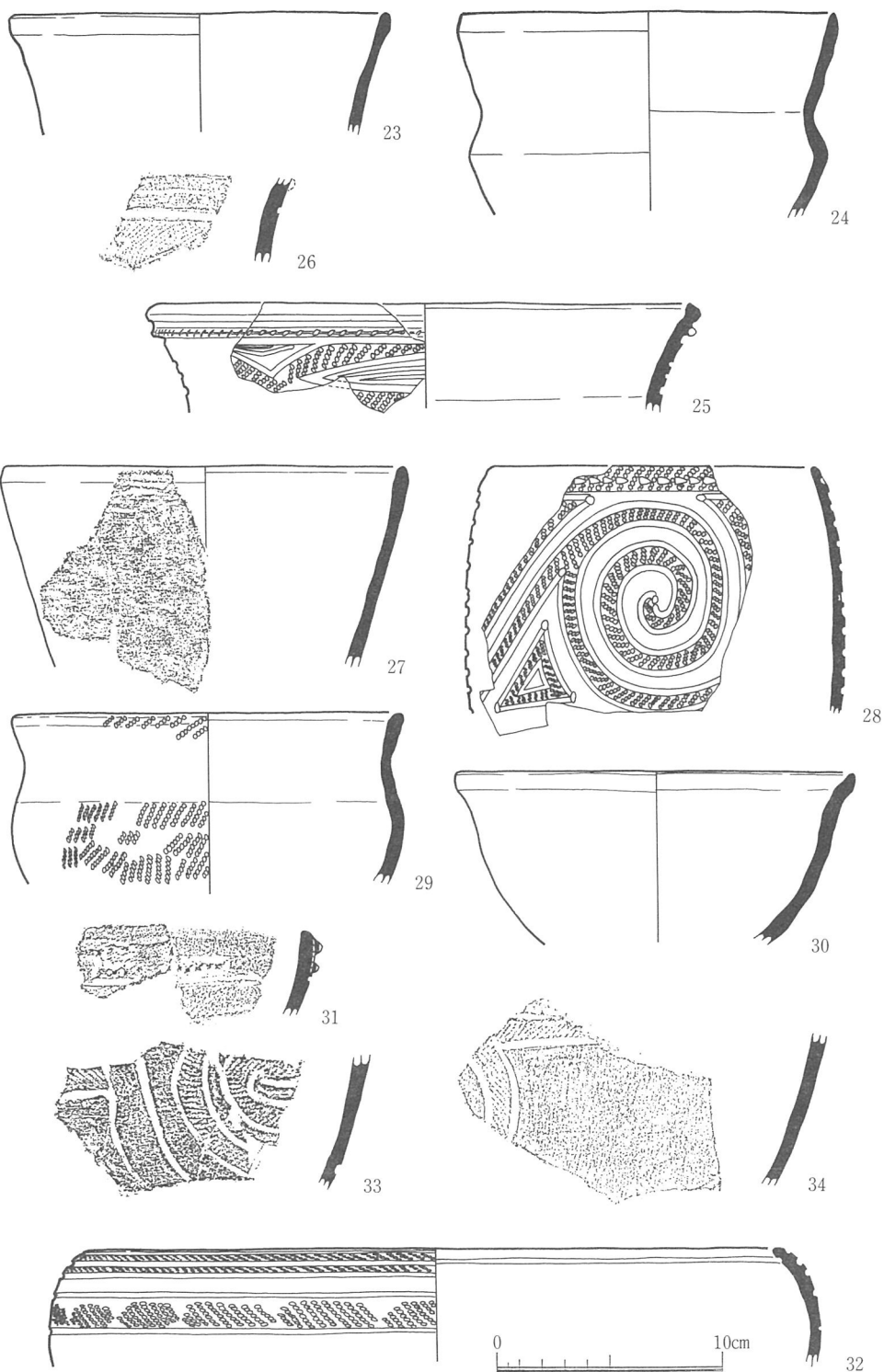
第35图 193—OD 出土土器(I)



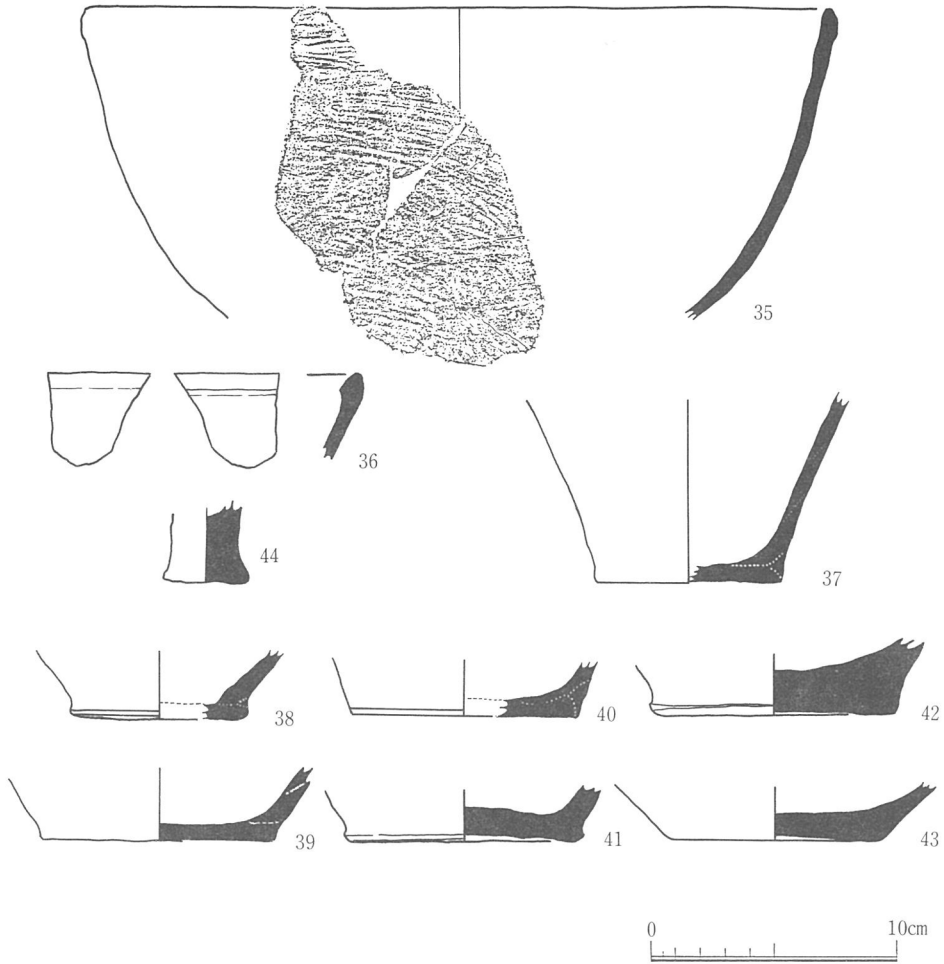
第36图 193—OD 出土土器(2)



第37图 193—OD 出土土器(3)



第38图 193—OD 出土土器(4)



第39図 193—OD 出土土器(5)

鉢 (29・30) 29は口縁部と胴部に縄文を施す土器で、口縁部はやや肥厚し、丸くする。巻貝条痕調整のあとナデ調整をおこなう。縄文は無節のLR縄文である。30は口縁部が外に開く器形の土器で、口縁部は外側に肥厚する。文様はなく、ナデ調整である。

浅鉢 (31~36) 31は口縁部直下に刻み目突帯を2条貼付けるものである。胴部には沈線とLRの縄文で充填縄文を構成する。32は口縁部が内弯し、端部は丸くなる。外面には横位の沈線文を描き、RLの縄文を施す。33は32とよく似た胎土・調整をおこなっており、同一個体と考える。沈線と縄文とで渦文の文様を描く。34は内外面とも丁寧に磨き調整をおこなっており、浅鉢の胴部と判断した。外面には幅の狭い縄文帯を描く。35は口縁部が外

側に肥厚するもので、碗状の器形を呈する。③⑥は口縁部が内側に肥厚している。

底部(③⑦~④③) いずれも平底を呈する。③⑦は胴部への立ちあがり急で、長胴形を呈する深鉢になろう。④③は胴部への立ちあがりゆるやかで、内外面とも丁寧なナデ調整をおこなっている。

ミニチュア土器(④④) 台付土器の台部と考える。底径は3.5cmを測り、台部の高さは2.5cmである。底部内面はナデ調整をおこなっている。

この遺構から出土した土器のうち、①②はその文様構成から判断して、他の土器より古くなるものであろう。波頂部下の頸部に貼付けられている刻み目突帯は関東地方の堀之内I式土器にみられる文様である。また胴部の文様も垂下する集合沈線文帯をジグザグに結んでおり、堀之内I式土器の中にみられる文様を模倣していると考え。③~⑥の口縁部文様はかなり退化しており、①②にくらべ、新しい時期のものとする。また②⑤・②⑧・③①・③②の土器は縄文帯の幅も狭く、横位の文様構成をもつ。②⑤は突帯をもつ点からも関東地方の堀之内II式土器の影響を強く受けている。②⑧は渦状、三角形の入組み文をもっており、②⑤と同様東大阪市縄手遺跡出土の第2類土器群<sup>(5)</sup>と近似する。③①も突帯をもっていることで②⑤と同じような土器と考える。これらのことからこの遺構出土の土器群は北白川上層式2期に比定できよう。

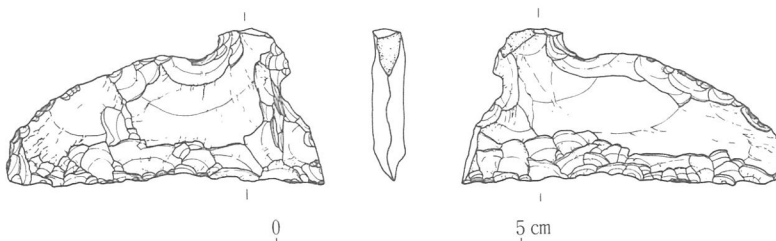
194-ODの柱穴からも若干の土器が出土した。476-OOの土器は内外面とも丁寧なナデ調整をおこなう土器である。縄文時代後期前半の土器であろう。

477-OOからは粗製土器の細片が3片出土している。いずれもナデ調整をおこなう。縄文時代後期前半の土器であろう。

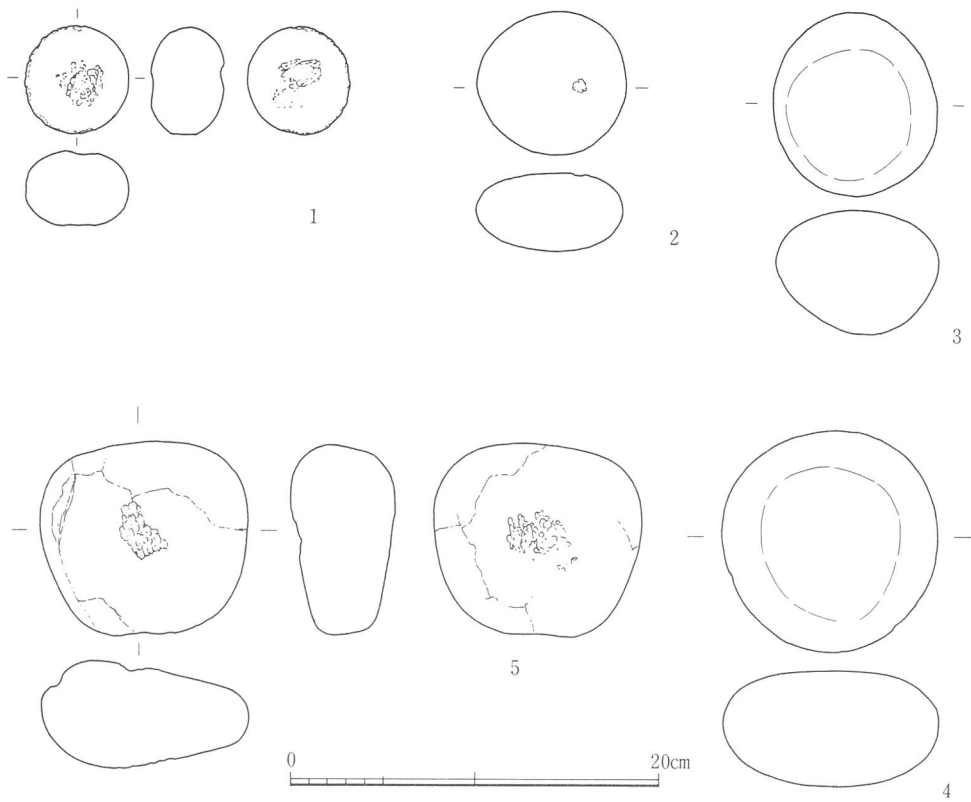
478-OOからは粗製土器が数片出土している。巻貝条痕調整・ナデ調整をおこなっている。縄文時代後期前半の土器であろう。

石器は石匙、石刀、円礫石器がある。

第40図は横形石匙である。体部は扁平で刃部は直線状である。つまみは短く体部の端部



第40図 193-OO 出土石匙



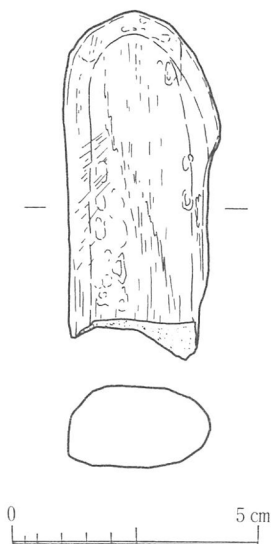
第41図 193-00 出土円礫石器

近くにつくり出されている。長さ31.8mm、幅65.7mm、厚さ7.7mm、重さ17.1gである。

第41図1～5は円礫石器で、敲石と磨石・台石がある。1・2は敲石である。1は円形で小形のもので両面と側縁の半周に敲打痕がある。2は片面の1個所だけに敲打痕がありあまり使い込まれていない。3・4は磨石である。5は台石で両面に敲打痕があり熱を受けている。1～5はいずれも砂岩である。

第42図は石棒と呼ぶべきかも知れないが、扁平であるため石刀とした。緑色片岩製で、残存長7.3cm、頭部幅3.2cm、厚さ1.7cmである。



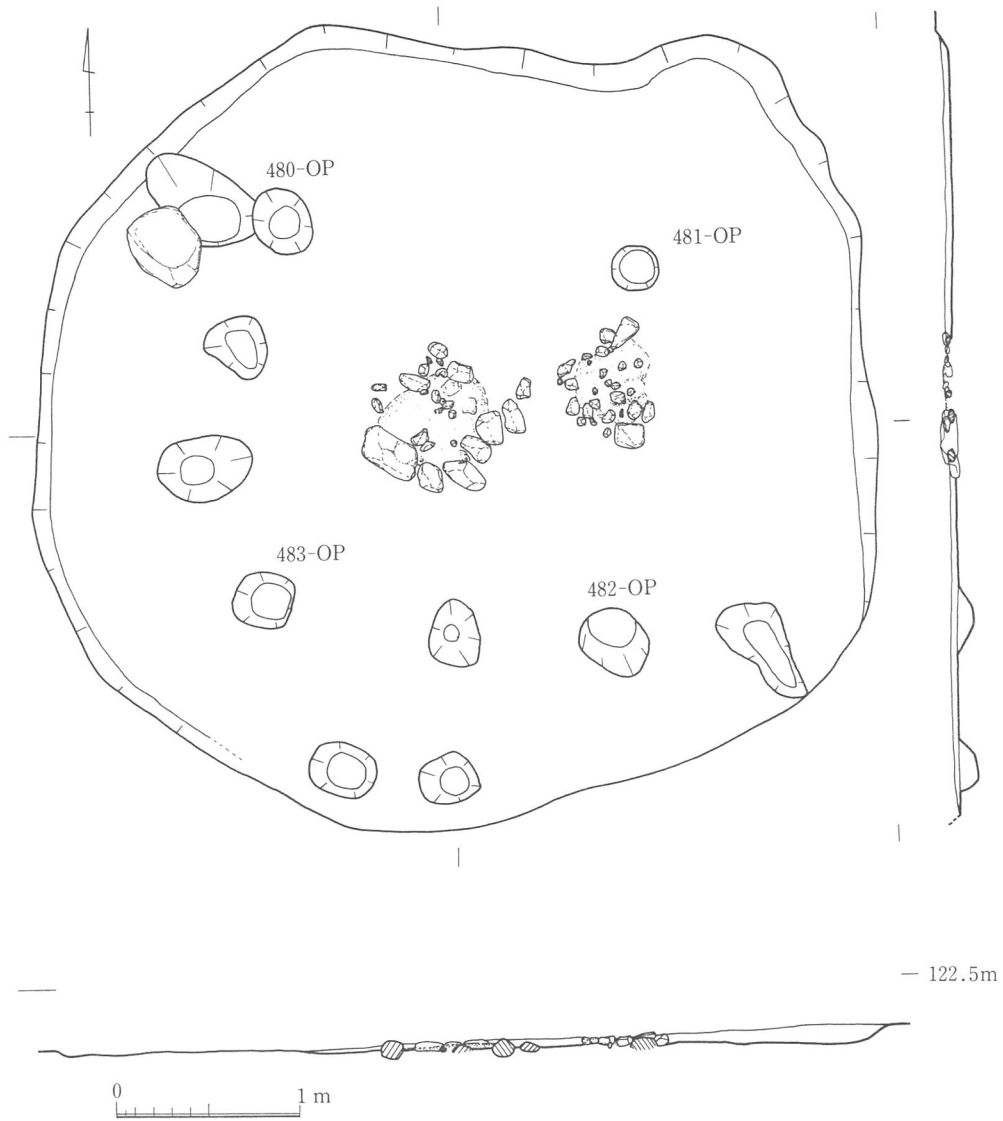


第42図 193-00  
出土石刀

354—OD G—20UD・VD 区にある。中央微高地の西縁である。平面形は隅丸方形を呈する。長さ4.6m、幅4.3mで、壁高は最大0.2mである。床面の中央と、その約1m東に炉跡がある。中央のものは径約0.6m、西のものは径約0.4mである。ともに保存状態は悪く、拳大～人頭大の礫の集積に混入して焼土が残存している状態であった。焼土のレベルは西側のものが若干高い。床面に貼床の痕跡は残存していない。床面には11個のピットがあるが、そのうち480～483—OPの4個は深さ50cm前後であり、位置からみても支柱穴と考えられる。埋土は暗褐色土であり、拳大の礫を多く含んでいた。床面近くまで削平されていることもあって層位の分離はできなかった。遺物はあまり多くなく、埋土のなかに散在して検出され、特に遺物の集中する部分や原位置を保っているとはみられない(第43図、図版22)。

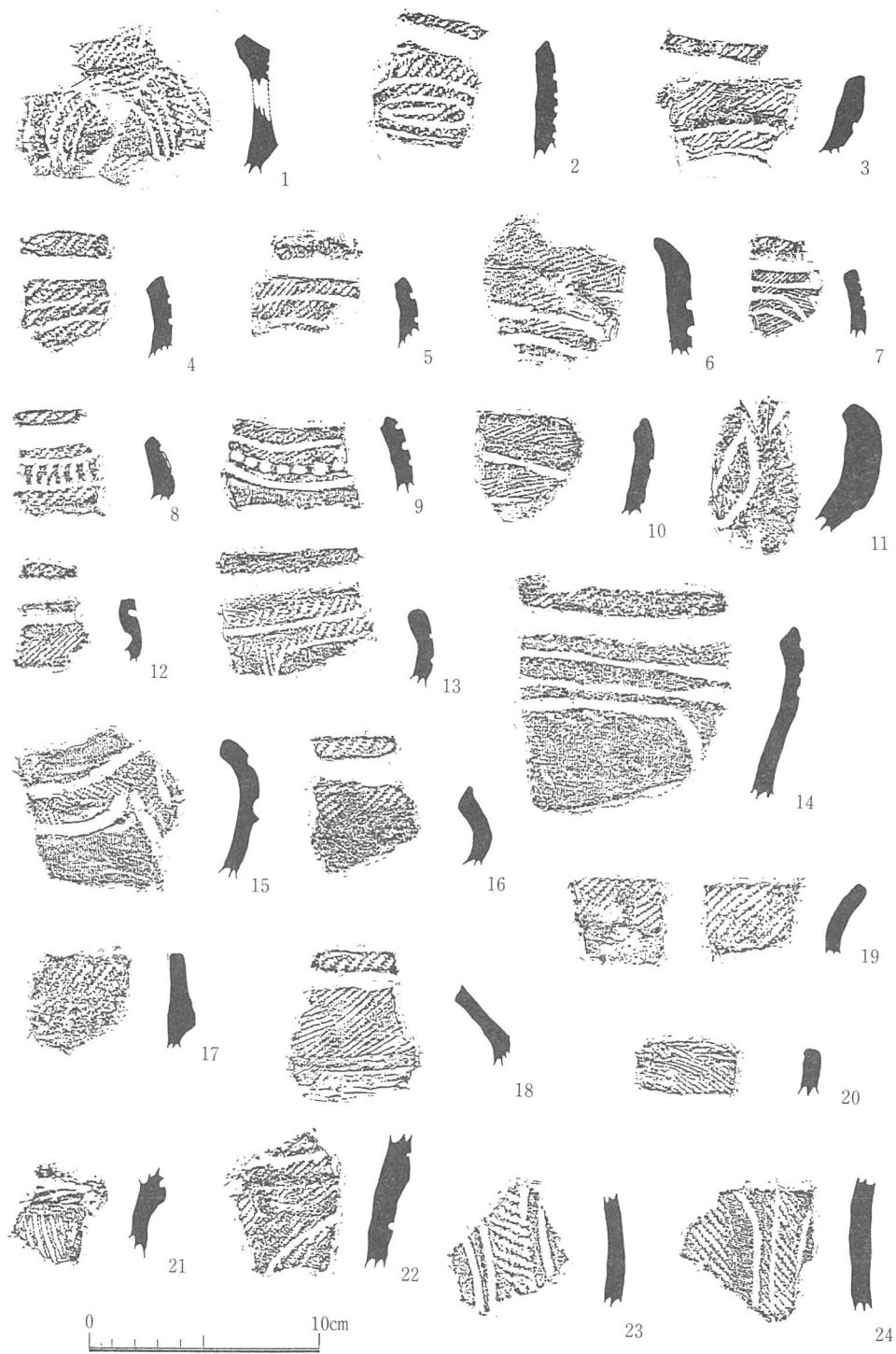
土器(第44～45図、図版44・45)

深鉢(①～⑩) ①～⑦は口縁部文様帯に沈線で同心円文や渦状の文様を描き、LRの縄文を施すものである。①は下に開いた円弧状の沈線を3条描き、左右にも沈線文が描かれている。口縁端部は内側に屈曲する。口縁部上端面にも縄文を施す。②は波状口縁になる深鉢で、沈線で偏平な渦文を描く。その上からLRの縄文を施す。口縁部上端面は内傾し、縄文を施す。③は下に開く弧状の沈線を描き、その上からLrの無節の縄文を施す。口縁部上端面は内傾し、器面同様無節の縄文が施されている。④⑤も下に開く弧状の沈線を描いてLRの縄文を施す。口縁部上端面にも縄文を施す。⑥は太い沈線を弧状に描くもので、口縁部上端が内側に屈曲する。上端面は丸く、縄文は施されていない。波状口縁を呈する。⑦は円弧状の沈線文と入組み状の沈線文が描かれている。口縁部上端面及び、器面にはLRの縄文を施す。⑧～⑩は口縁部に平行する沈線を描くもので、⑧は沈線間に刺突文を二段に並べる。その上からLRの縄文を施す。⑨は押し引き刺突文である。⑩は沈線が直線的であるため、ここで記述するが、③～⑤に近いものかもしれない。口縁部上端面には縄文は施さない。⑪は波状口縁を呈するもので、波頂部下の口縁は粘土を貼付け隆带状にし、その左右には沈線による区画文を描く。胴部には垂下する沈線を描き、縄文を施す。口縁部上端面は内傾し、縄文を施す。⑫は口縁部に1条の深い沈線を描く。沈線間および口縁部上端面にはLRの縄文を施す。⑬～⑮は沈線を口縁部から胴部にかけて描き、そのあとLRの

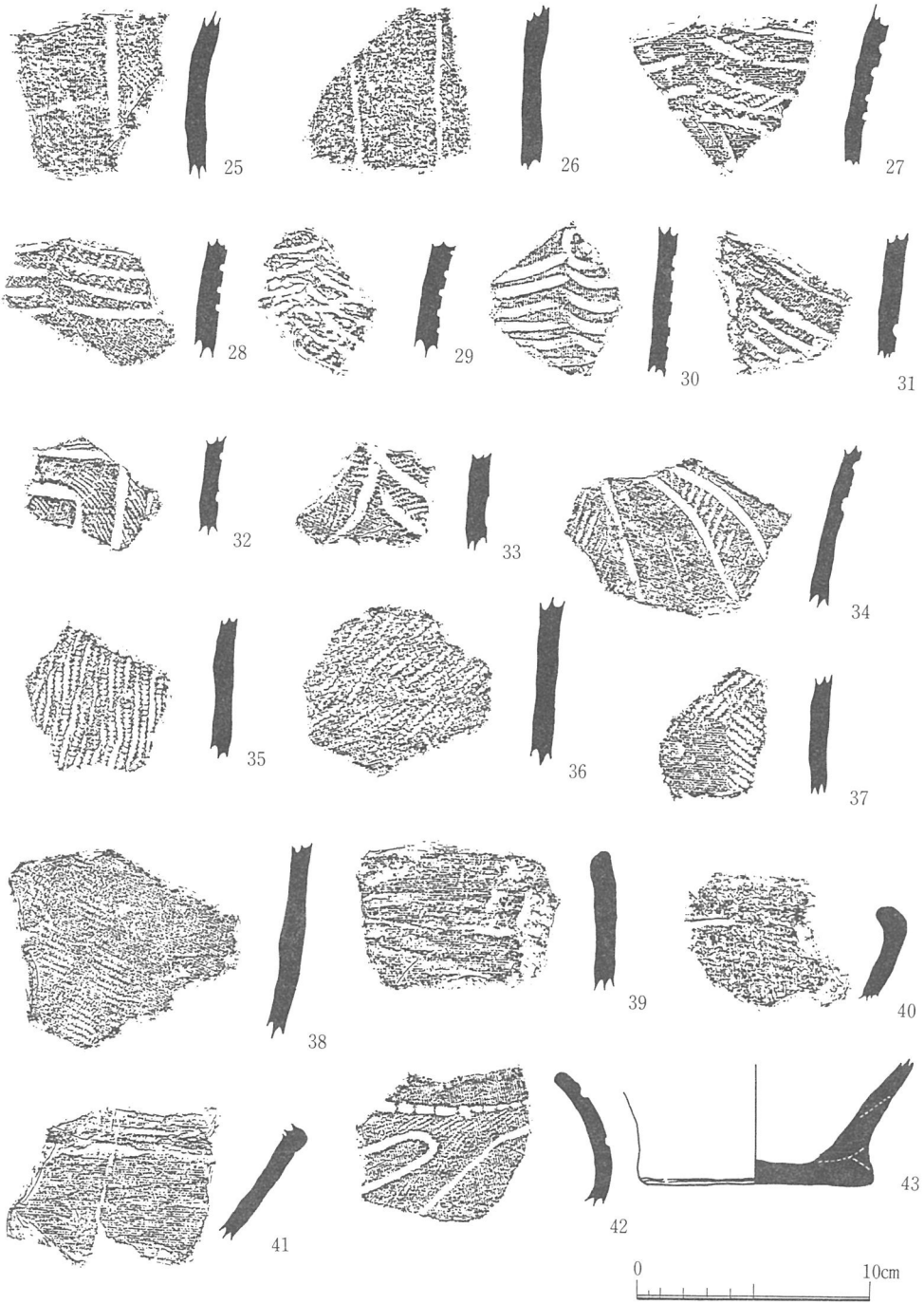


第43図 354-OD

縄文を施す。⑬は口縁部直下の沈線の上に横位の縄文を施し、胴部には縦位の縄文を施す。口縁端部は丸くなり、そこにも縄文を施す。⑭は太い沈線を口縁部に沿って描き、そのあと縄文を施す。この沈線の一つは胴部の方へ曲線的につづく。口縁部上端面は内傾し、そこに縄文を施す。⑮は波状口縁を呈する深鉢である。沈線文は波頂部から口縁に沿って描かれるものと、胴部にむかうものがある。沈線間にはRLの縄文が充填される⑯～⑳は口



第44图 354—OD 出土土器(1)



第45图 354—OD 出土土器(2)

縁部に縄文を施すだけで口縁部文様帯を構成するものである。⑬は口縁部が内弯し、端部は上方につまみだされる。口縁部上端面は内傾する。口縁部および上端面には LR の縄文が施される。⑭は口縁部下端が肥厚し、段をもつ。口縁部には LR の縄文を施す。⑮は口縁部が内側に屈曲するもので、口縁部および口縁部上端面には LR の縄文を施す。胴部には沈線文が描かれている。⑯は口縁部が外反する。口縁部内外面に LR の縄文を施す。口縁部上端面はナデ調整で、縄文は施さない。⑰は直口縁の深鉢で、口縁部上端面および口縁部外面には RL の無節の縄文を施す。⑱⑲は口縁部下端が肥厚し、口縁部文様帯と胴部文様帯とが区別される土器である。⑲は口縁部文様帯の下部に沈線をめぐらす。口縁部には LR の縄文を横位に施す。胴部は縦位に施す。⑳は口縁部文様帯の下端に 1 条胴部にも曲線的な沈線を描く。そのあと縄文を施すが、この縄文は RL と考える。㉑～㉒は垂下する沈線文をもつ土器である。㉑は垂下する LR の縄文帯の左右に 2 条単位の沈線文を描く。施文順は垂下沈線が先で、そのあと縄文を施す。㉒も同様の文様構成をもつ。㉓は沈線間に縄文を施す。㉔は沈線のみで縄文はない。㉕～㉖は上に開く連弧状沈線を数段重ね、そのあと LR の縄文を施す文様をもつ土器である。㉖は沈線文のみである。㉗は連弧状の沈線を数段重ねる文様をもつが、弧の左右には渦状の沈線と刺突文が描かれている。㉘～㉙は太い沈線を曲線的に描き、縄文を施すものであるが、㉘は充填縄文ではなく沈線の区画に規制されずに施されている。㉚㉛は沈線間に縄文を充填する。㉜は RI の無節の縄文である。㉝～㉞は器面に LR の縄文を施すものである。㉝㉞は縄文を横位に施し㉟㊱は縄文の施文間隔をあけて縦位に施す。㊲㊳は無文の深鉢である。㊲は外面を粗くナデ調整する。㊳は口縁部を内側に折り曲げるものである。

浅鉢 (㊴・㊵) ㊴は頸部下端で屈曲する器形を呈するもので、外面はナデ調整をおこなう。㊵は口縁部が内弯し碗状の器形を呈する。口縁部は丸くする。器面には太い押しき状の沈線を曲線的に描き、沈線間には LR の縄文を充填する。

底部 (㊶) 底径10cmを測る平底の土器である。外面はナデ調整で、内面も粗いナデ調整を施す。

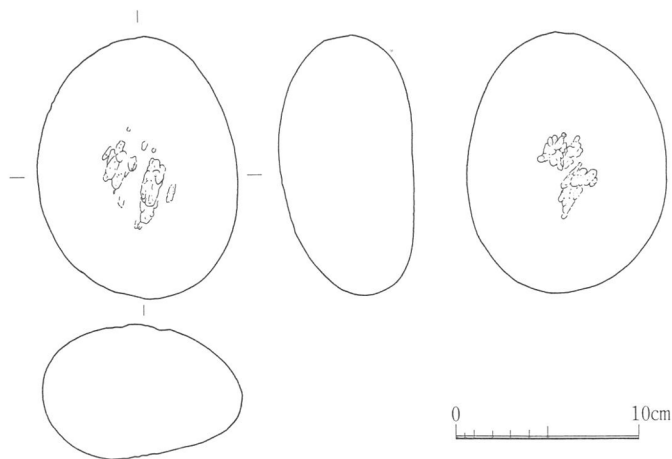
この遺構から出土した土器は口縁部文様帯と胴部文様帯が区切られているものが多い。主な口縁部文様としては①～⑦のように渦文や同心円弧文で口縁部文様帯を構成するもの、⑧～⑩・⑫のように口縁部に平行するように沈線と縄文を施し、文様帯を構成するもの、⑬～⑰のように縄文だけで口縁部文様帯を構成するもの、⑱のように沈線による区画文で口縁部文様帯を構成するもの等がある。胴部文様帯としては、㉑～㉒のように垂下する沈

線と縄文による文様帯のもの、⑳～㉓のように連弧文を描くもの、㉔～㉗のように縄文を施すだけのものがある。このように様々な文様が存在するが、口縁部と胴部の文様がどのように構成されるかは破片資料のため明確ではない。ただ隆帯と沈線区画文をもつ㉑には、胴部に垂下沈線文が確認できる。また口縁部に LR の縄文を施すだけの㉒は口縁部直下に沈線文が描かれるが、この沈線文がどのような文様を構成するか詳かではない。このように口縁部文様帯と胴部文様帯とが明確に区別できるものの他に、口縁部文様帯と胴部文様帯との境界があまりはっきりしないものも出土している。㉓～㉕・㉖～㉗・㉘がそれである。㉓㉔は口縁部に沿った文様帯がまだ残るが、そこから胴部へとつづく沈線が描かれており、徐々に文様が器面全体に拡がろうとしている。㉕は縄文帯が胴部へと展開してゆくものである。㉖～㉗は胴部破片であるため詳かではないが、㉖㉗は波頂部から胴部へと縄文帯が展開するものであろう。㉘は口縁部に沿う縄文帯を区画する沈線が胴部縄文帯の区画沈線と一連のもので、この土器においては口縁部文様帯と胴部文様帯とが区別できない。

以上のように、この遺構から出土した土器には文様帯が明確に区分できるものとそうでないものが存在している。区分が明確なものも、区画内ではかなり退化した文様になっており、突帯もあまり高くなかったり、沈線におきかわったものである。区分が不明瞭な土器には充填縄文を施すものさえ含まれており、中期でも最終末に比定できる。㉕㉘は中津式土器とも考えられるが、㉕の沈線は一部で途切れており、口縁部縄文帯と胴部に垂下する縄文帯の集約部とも見て

とれる。㉘も押し引き沈線を用いる点がやや古い要素である。いずれにしてもこの2点は中津式土器に近似する。

石器は砂岩の円礫を利用した叩き石である。楕円形を呈し両面の中央に敲打痕が集中し凹部をなす(第46図)。



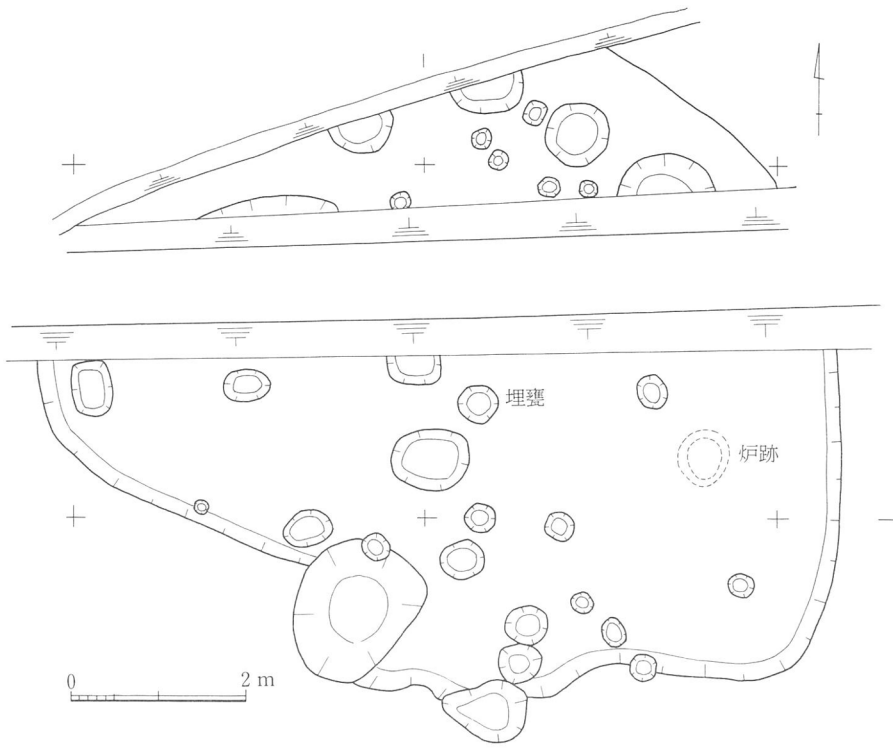
第46図 354—OD 出土敲石

374—OD 中央微高地、G—20—RG・RH・RI・QG・QH・QI 区に検出された。東西方向に長く、不整楕円形を呈する。検出時点から2棟の竪穴住居址が重複していると判断し、掘下げたが、重複関係は確認できなかった。東西9m、南北3.5mにわたって凹んでいる。床面には凹凸があるが、掘下げる際、若干掘過ぎたものとする。後述する炉跡や埋甕遺構等の所見から床面の高さは海拔122.40m前後と考える。この遺構内には炉跡1箇所・埋甕遺構1箇所・ピット16箇所が検出された。炉跡はQH区東半に検出した。炉は中央部が凹み、炭・灰が混った土が堆積し、その周囲は径約40cmのドーナツ状に焼土が高くめぐる。その外側は熱を受けて土が変色している。焼土や炭・灰を除去すると径約60cmの浅い凹みがあり、その中に5～10cm大の礫が散在していた。炉の周囲の高さは海拔122.40m前後である。埋甕遺構はQH区西半に検出した。径35cm前後のピットの中に胴部下半及び底部を欠失した深鉢が正立して検出された。深鉢とピットとの隙間はほとんどなく、深鉢が納まる最小限の大きさにピットを掘っている。深鉢の口縁部の高さは海拔122.40m前後である。ピットは径15～70cmと大きさは様々であるが35～50cm大のものが多い。深さは底面の高さが海拔122.15m前後のもの、122.20m前後のもの、122.30m前後のものがある。QG区に検出したピットは122.20m前後の深さのピットである。QH区に検出したピットは122.15m前後のもの、122.30m前後のものがある。

この遺構は調査の不手際により床面を掘過ぎ、重複関係も確認することができなかったが、炉跡と埋甕遺構により、床面の高さを推定することができる。炉は住居址の床面に密着して設置されたものと仮定すれば、焼土の下面の高さが床面とほぼ近い高さであろうと考えることができる。埋甕遺構もその口縁部上端が床面とほぼ同じ高さに埋められる事例が多く、この両者から推定して、床面の高さは海拔122.40m前後と考えられる。ピット群は住居址の床面を122.40m前後と仮定してそこからの深さを観察するとQG区のピットは15～18cmの深さをもっている。QH区は6.5～35cmとばらつきがあるが、20cm以上の深さのものが多い。一つの住居址のピットがほぼ同じ深さにそろえて掘られるという根拠はないが、二つの住居址が重複していて、重複関係が判然としない場合、それぞれのピットがどちらの遺構に帰属するかを推測する一つの手段として用いる事は可能であろう。しかし、この住居址においては、どちらの住居址のピットであるかという推定はせず、深さが何種類か存在するというにとどめたい(第47図、図版19～21)。

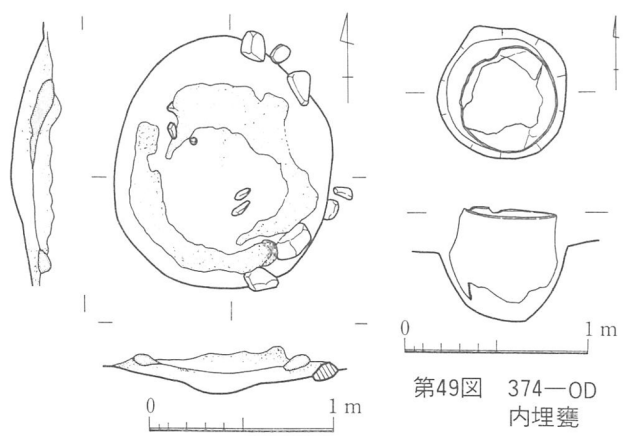
土器 (第50～53図、図版46～48)

深鉢 (①～④⑦) ①～③⑥は口頸部が外に開き、頸部下端で屈曲し、胴部がふくらむ器形



第47図 374-OD 平面図

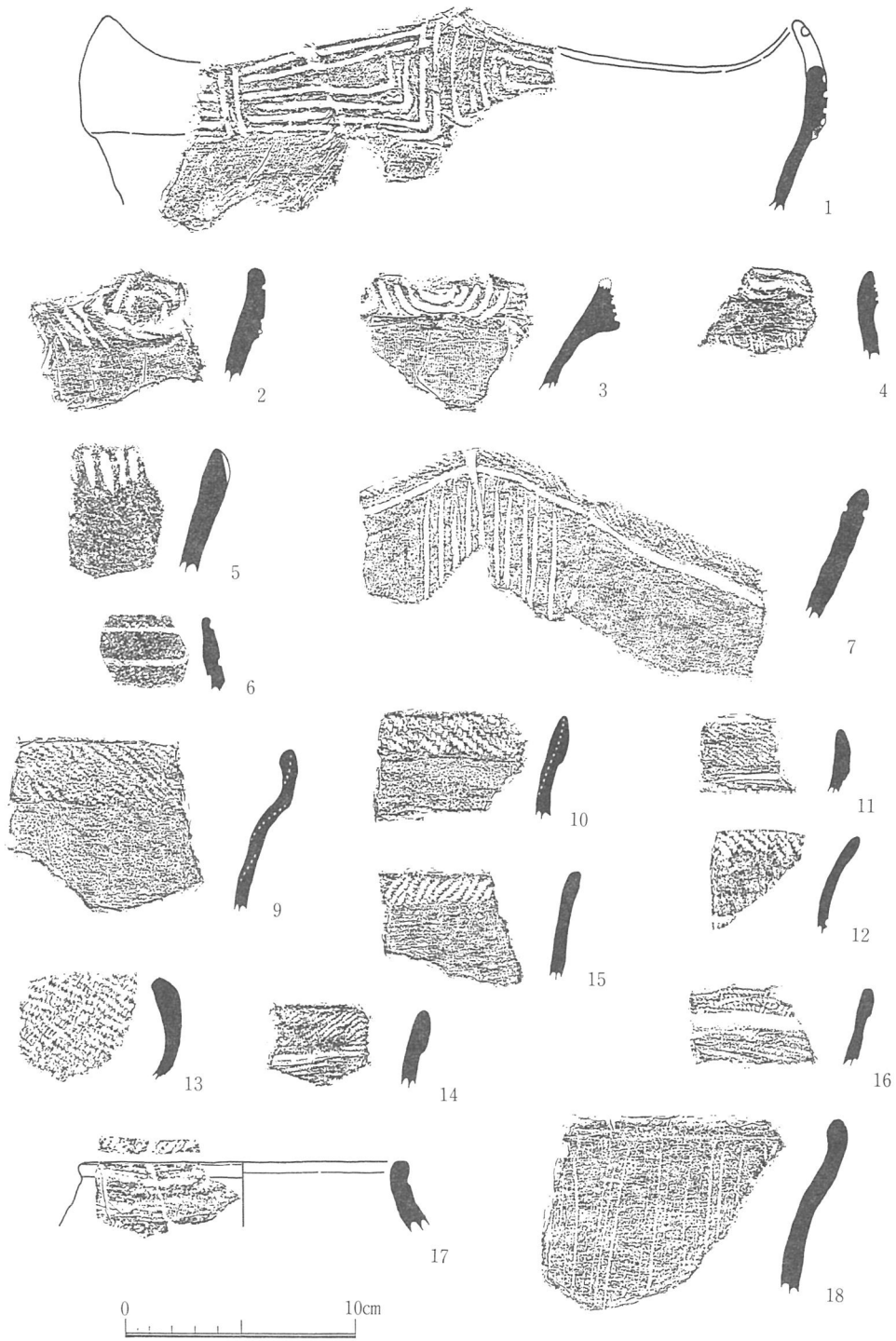
を呈する土器である。①～③は口縁部が外側に肥厚し、口縁部外面に沈線で文様を描く。いずれも波状口縁で、①は波頂部の上下に円形刺突文を施し、それを沈線で連結する。その左右には方形区画文を描く。波底部では2条の沈線を描く。②は波頂部に同心円文を描いて、その左右には弧状沈線文を描く。③は波頂部上端を欠失するが、同心円罎文



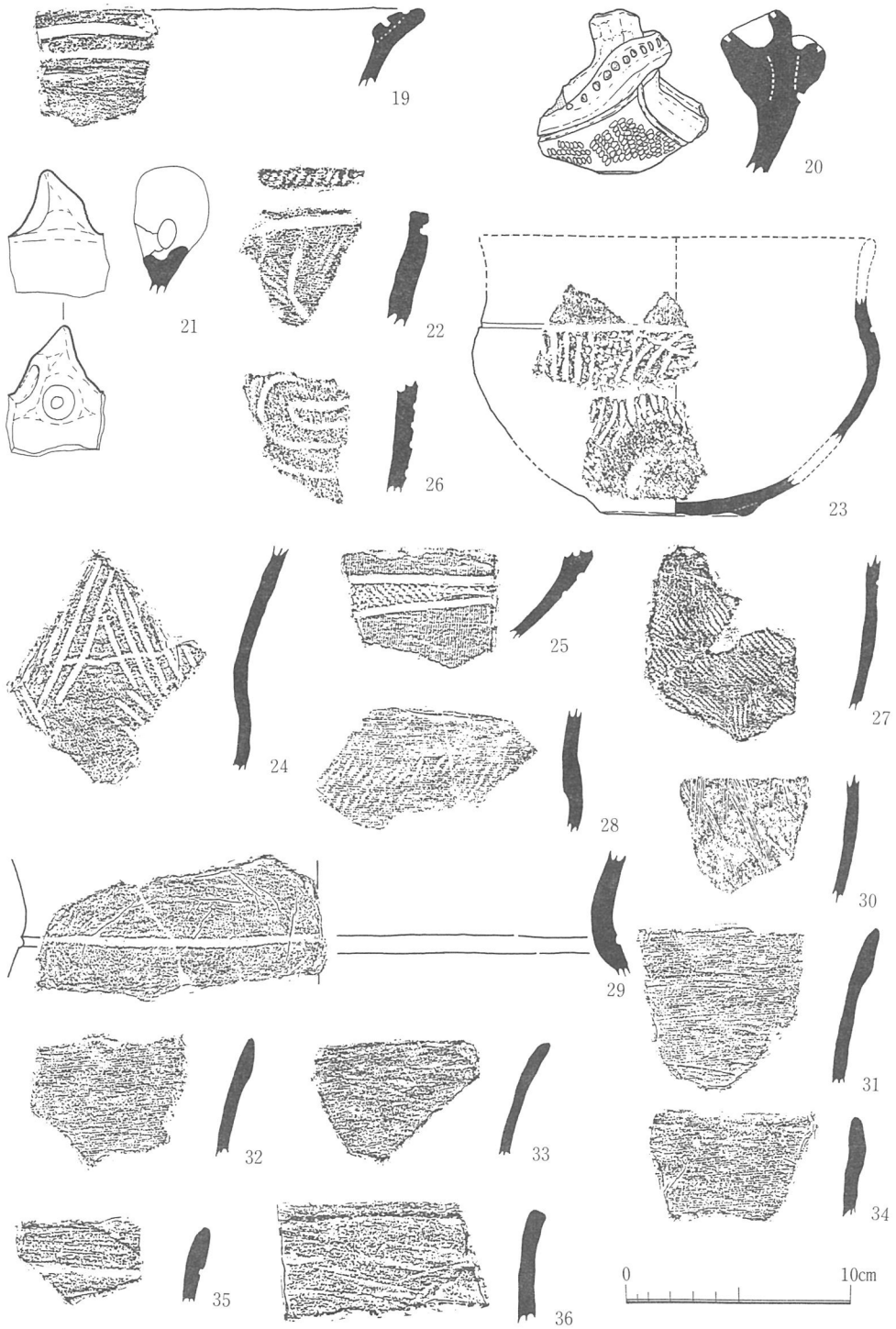
第48図 374-OD 内炉跡

第49図 374-OD 内埋甕

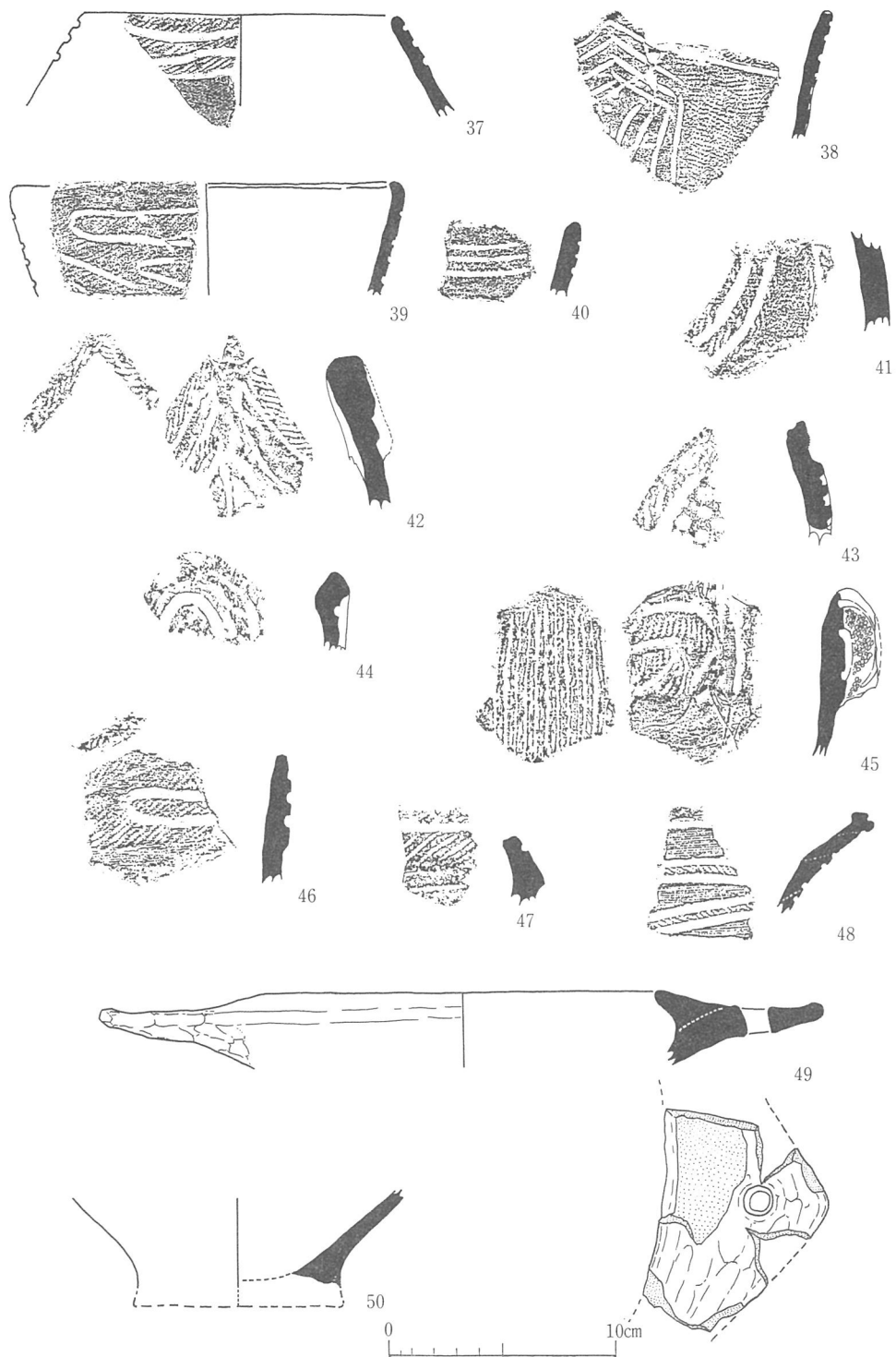




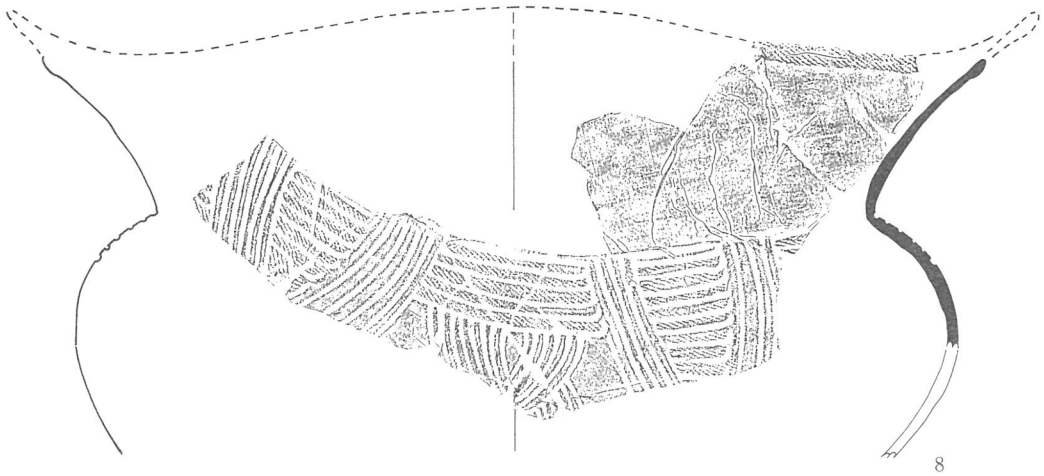
第50图 374—OD 出土土器(1)



第51图 374-OD 出土土器(2)



第52图 374—OD 出土土器(3)



第53図 374—OD 出土土器(4)

を描いてその左右には方形区画文を描く。④も外側に肥厚した口縁部外面に上に開く同心弧文状の文様を配する。波状口縁になるかどうかは不明である。頸部は無文で、胴部には間隔をあけて垂下条線文が描かれる。⑤は外側にやや肥厚した口縁部に短沈線による刻みを施したものである。⑥は内側に屈曲した口縁部に2条の沈線を平行して描き、その上からRLの縄文を施す。⑦は波状口縁を呈する深鉢で、口縁部はあまり肥厚しない。口縁部内外面には1条ずつ沈線をめぐらし、その上部にRLの縄文を施す。また波頂部下の頸部外面には垂下する集合沈線文を描く。⑧～⑯は外側に肥厚する口縁部の外面に縄文を施す土器である。⑧は波状口縁を呈し、頸部は大きく開く。胴部は大きく膨らみ、器高より胴部径の方が大きい。頸部は無文で、胴部には斜めに垂下する平行沈線文とそれらを連結する横位の平行沈線文を描く。また、横位の平行沈線文間にはRLの縄文を施す。この土器は口縁部と頸部下端から胴部にかけて赤色顔料を塗布している。内外面とも丁寧にナゲ調整をおこなう。⑨～⑯は口縁部のみの破片で、⑨～⑬はRLの縄文を施し、⑭⑮はLRの縄文を施す。⑯は巻貝による擬縄文である。⑰は頸部が内傾し、口縁部が直立するもので、口縁部上端面を平坦にし、そこにLRの縄文を施す。⑱は頸部に口縁部から垂下する条線文を描